

飛鳥研究学史 (2001～2010)

－調査研究の現状と課題－

相原 嘉之

I. はじめに

21世紀を迎えた飛鳥に、真っ赤な朱雀が舞い降りた。それは最新科学技術が古代世界を映しだした瞬間でもあった。新世紀の飛鳥では多くの発見があり、飛鳥文化の奥深さを改めて認識した10年でもある。同時に、科学技術は完全ではなく、それを扱う我々の姿勢によることも大きいということを痛感させられた10年でもあった。文化財と私たちの関係をもう一度見つめ直す時期でもある。このような変革の時代を迎えている今日、文化財の調査研究や文化財行政も、多くの課題を抱えながら進み、変化を要求されている。それは調査研究だけでなく、保存・活用が大きく模索されたことにも表れている。

本稿では、これらの諸課題を解決するための視点を得るために、飛鳥地域の調査研究史を振り返ることとする。筆者はすでに1991年から2000年にかけての10年間の調査研究史について纏めたことがある(相原2006a)。それまでの研究の蓄積の整理と課題の洗い出しによって、次なるステップとするものであった。本調査研究紀要の創刊の目的でもある飛鳥文化の解明に向けても、意義のあるものとする。さらに考古学調査と文化財保護の歴史についての研究史を整理し、その結果、考古学調査の契機として、各種の文化財保護の法律制定や調査研究機関の設置などと、調査研究が密接にリンクしていることも判った(相原2011)。

飛鳥研究の歴史は長く、関連諸分野は極めて広範囲にわたる。よって、これらを総合的・網羅的に簡要にまとめるのは困難である。そこで、前稿同様に、その対象を限定せざるを得ない。今回扱う地域は飛鳥文化の中心ということもあり、飛鳥を中心として藤原京地域までのエリアを設定した。現在の行政区では、明日香村と高取町・橿原市・桜井市の一部である。その研究領域は筆者が埋蔵文化財の調査研究に携わっていることもあり、この分野が主流をなすが、出来る限り関連諸分野の研究にも言及したい。時代設定は飛鳥文化、つまり7世紀を中心としながらも、それ以前・以降についても触れる。また研究史の時期であるが、前稿からの継続として、2001年から2010年までの10年を対象とする。

以上の理由によって、本稿で扱う研究史は前稿同様に、ここ10年間における飛鳥を中心とした飛鳥時代の埋蔵文化財に関する調査研究を総括することとする。なお、記述の都合上、研究者の敬称は全て省略した。お許し願いたい。また、今後の利用の便を考え、当該年間の文献目録も公開している(相原2013)。遺漏も多いと思われるが、ご教示・ご指摘をいただきたい。

II. 発掘調査の動向

開発の動向

明日香村は古都保存法・明日香村特別措置法によって、村内全域が文化財保護法の周知の埋蔵文化財包蔵地になっており、事業の大小にかかわらず、すべての開発行為において埋蔵文化財発掘届及び風致申請書等が必要となってくる。さらに平成23年4月には景観行政団体になり、景観計画も施行された。このように幾重もの遺跡保護・景観保護の規制がなされている。よっ

て、住宅・倉庫の新・改築や土地造成、公共事業、電気電話等の電柱の建て替えなどの事業には、上記の申請が必要となる。

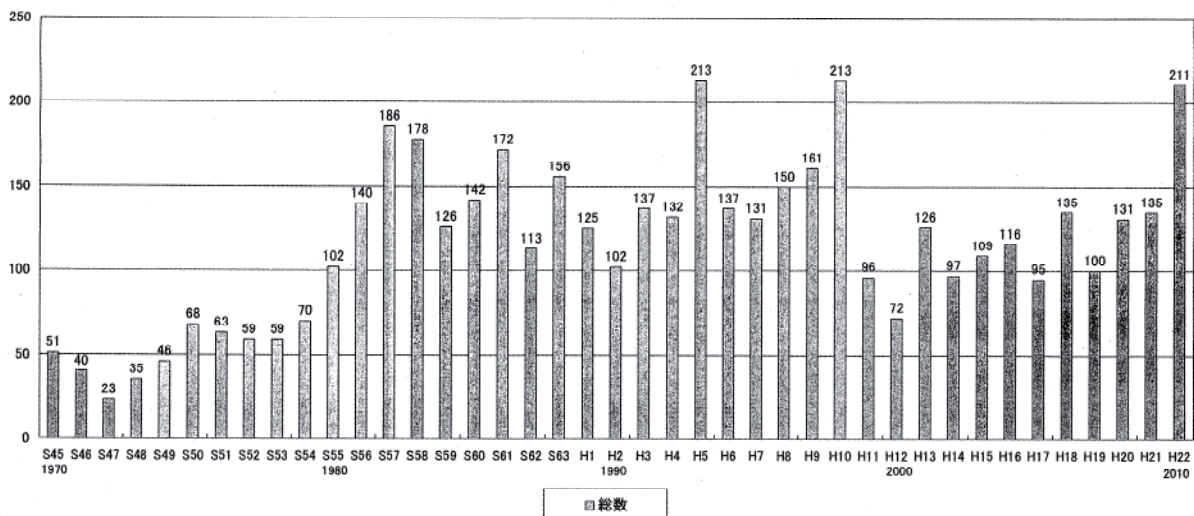
この10年間における全国の埋蔵文化財発掘届出件数は、平成18年度にひとつの山に達し、さらに2010年にはそれを越える二度目のピークとなっている。しかし、これらの発掘届に対する実際の発掘調査は、ほぼ8000～9000件と安定している。遺構保護が担保される場所では、発掘調査を実施しない傾向にある。明日香村内における埋蔵文化財発掘届出件数は、全国傾向と同じように、平成18年度に135件とひとつの山があるように見えるが、平成19年度が100件と一時的に減少しているものの、以降、平成22年の211件に向けて、徐々に増加しているとみるべきである。平成13年から平成17年度まではほぼ100件前後で安定した推移しており、これは平成21年度から続く傾向である。平成18年度以降は、電気工事関係の申請が増加の要因である。電柱の老朽化に伴い、建て替えが増加しているためである。もうひとつ国营飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区をはじめ、公園整備や公園の維持管理に伴う申請も増加している。

これらの発掘届に対して、明日香村内では明日香村教育委員会と奈良文化財研究所、橿原考古学研究所がその発掘調査・立会調査の対応をしている。

発掘調査の動向

この10年の飛鳥地域の発掘調査は、これまで同様に独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・奈良県立橿原考古学研究所・橿原市教育委員会・桜井市教育委員会・高取町教育委員会と明日香村教育委員会によって実施されてきた。ここでは各年度ごとの調査の概要について、まとめておきたい。

平成13年度（2001）の調査では、数年前から継続している飛鳥京跡苑池と酒船石遺跡の調査が注目される。飛鳥京跡苑池は、出水酒船石が出土した場所で、平成10年度になってはじめて確認された庭園遺構である。本年度は中島の形状を確認するとともに、北方への水路を確認した（橿考研2012）。飛鳥宮跡では東外郭内で調査が行われ、東西方向に伸びる石敷が確認された。宮内から外部へと通じる通路と考えられている（橿考研2002a）。酒船石遺跡では亀形導水施設周辺の整備に向けて、湧水施設背後の調査を行った。遺存状態はあまりよくなかったが、斜面地にも石垣等がめぐっていることが判明している（明日香村2006a）。この地域の整備は当



第1表 明日香村内発掘調査届出件数の推移

年度に実施され、公開されている。同遺跡では、しばらく休止していた丘陵上の調査を再開した。亀形石槽上方の丘陵斜面地、第1次調査地の延長上で、砂岩石垣の基礎石列を確認している(明日香村2006a)。さらに遺跡西辺では、平成8・9年度に確認した大型石組溝の延長部を調査した。飛鳥宮跡の東を画する基幹水路と考えられている(明日香村2006a)。酒船石遺跡にかかわる遺跡として飛鳥宮ノ下遺跡がある。飛鳥東垣内遺跡の延長部で、狂心渠と推定される運河跡である(明日香村2006a)。石神遺跡では、前年度に確認した北面大垣の東隣接地を確認した(奈文研2002a)。また、高取町清水谷遺跡では渡来系氏族の大壁建物が出土している(木場2002)。藤原宮跡では平成11年度より朝堂院を中心とした中枢部の調査が開始されている。当年度は大極殿院東回廊を調査した。従来、東回廊に取り付くと考えられていた建物が、7間×2間の東門であることが判明した(奈文研2003a)。また、宮城のすぐ南にあたる左京七条一坊西南坪で、中務省に関連すると考えられる大量の木簡が出土している(奈文研2002a)。寺院関係では、飛鳥寺旧境内の北面大垣が調査され、低い基壇をもつ大垣であったことが確認された(明日香村2003a)。また岡寺では防災施設の設置に伴い、境内地が調査された。調査範囲が限られているため、顕著な遺構は確認できなかったが、瓦の出土状況から、治田神社境内だけでなく、現境内地にも同時期の建物があつたことが推定された(檀考研2002a)。古墳の調査では、本年度からキトラ古墳の調査と保存が文化庁に移り、その事前調査として、デジタルカメラによる4回目の探査を実施した。これにより盗掘孔の規模が確定し、さらに十二支像の壁画を新たに確認している(奈文研2008a)。

平成14年度(2002)、酒船石遺跡の丘陵上で、L形に曲がり階段上を呈する石英閃緑岩の基礎石が確認された。砂岩切石は現位置には残っていなかったが、石垣の東端の可能性が考えられる(明日香村2006a)。遺跡西辺では前年度に続き石組大溝を検出し、木簡が多数出土している。飛鳥宮跡の宮外に木簡を出土する官衙が立地することが推定された(明日香村2006a)。石神遺跡の調査では、北面大垣の北側に湿地が広がっており、ここから具注暦木簡が出土した(奈文研2003a)。明日香村の南端にあるホラント遺跡では石敷が確認された。飛鳥中心部から離れた地での石敷の存在は、これまでの認識を改めるものとなる(檀考研2005a)。また、紀路に面した丘陵上にある森カシ谷遺跡では、建物や柵列などが見つかった。古代官道に面した防衛・監視施設とみられる砦跡と推定されている(木場2003a)。安倍寺遺跡では6世紀末から7世紀初頭の山田道西側溝とみられる石組溝が確認された(桜井市2012)。藤原宮跡では朝堂院の調査が継続している。当該年度は東第二堂と朝堂院東門を確認した(奈文研2004a)。坂田寺跡では、奈良時代の寺域北辺の様相が判明してきた。掘立柱建物や墨書土器が出土しており、寺院を支える地域と推定される(明日香村2004a)。キトラ古墳では、カメラによる予備調査を受けて墓道前半部の調査を行った。これにより、墓道及びその構造が判明した。また、これらのデータを基に、仮設覆屋を建設している(奈文研2008a)。細川谷古墳群の一画にあたる馬場頭地区では6世紀～7世紀の小古墳群が確認された。本来は都塚古墳と同じ尾根上に位置するが、現況は水田等になっていた所である(明日香村2004a)。高取町与楽カンジョ古墳では渡来系の巨大な古墳が調査されている。真弓丘陵のこの地域では、真弓鎌子塚古墳をはじめ、渡来系の古墳が数多く作られた地域でもある(高取町2012)。この他にも当年度には、古宮遺跡から出土し、現在は宮内庁三の丸尚蔵館に保管されている金銅製四環壺を、最新の機器を使った調査をした。それにより胴部に唐草文様や鳳凰が刻まれていることが判明した(奈文研2003c)。また、昭和62年度に雷丘東方遺跡で出土した井戸枠の年輪年代測定をした結果、758年+aという年代を算

出した。これは淳仁天皇の即位した年にあたり、760年は小治田宮行幸の年にあたる（相原・光谷2002）。これらはいずれも、過去に出土した遺物を最新の技術によって再調査をした成果である。

平成15年度（2003）には、飛鳥宮跡の内郭中枢部の調査が始まった。これまで内郭の中では唯一未解明だった地区である。その初年度は内郭前殿の北側を調査し、大型建物の一部とその前に広がる石敷広場を確認した（榎考研2008a）。また、飛鳥宮北辺推定地に近い位置で南北石組溝も検出している（榎考研2011a）。酒船石遺跡では前年度に確認した砂岩石垣東端の、尾根を隔てた反対斜面でも同様の遺構を確認し、これで砂岩石垣の東端であることが確定的となった（明日香村2006a）。これら一連の調査を踏まえて、翌年には史跡の追加指定がなされている。本年度から明日香村教育委員会では、島庄遺跡の範囲確認調査を3年計画で開始した。初年度は遺跡西辺の飛鳥川に近い水田地区から調査をはじめたが、飛鳥時代の顕著な遺構は確認されていない。しかし、石舞台古墳の西側の大型駐車場で3時期の変遷をもつ大型建物を確認し、注目を集めた（明日香村2008a）。一方、ホラント遺跡では昨年の石敷の続きに加え、大壁建物を確認した（榎考研2005a）。藤原宮跡では東第三堂と朝堂院南東隅部を調査している。ここでは朝堂院の南東部に接続する回廊を検出し、朝集堂を区画する院を形成することが明らかとなった（奈文研2004a・2005a）。一方、藤原京左京一・二条四坊では二時期の道路交差点が確認され、中ツ道（東四坊大路）であると考えられている。これまでに考えられている中ツ道の最南端での検出例となった（榎原市2005a）。寺院の調査では、川原寺の寺域北辺を調査し、北面大垣と川原寺付属工房を確認した。工房は冶金関連工房で、他に鉄釜鑄造遺構や瓦窯の灰原がある（奈文研2004b）。キトラ古墳では仮設覆屋の中で、墓道後半部の調査を実施した。これで石槨までの墓道を調査し、石室の南側の構造を確認したことになる（奈文研2008a）。

平成16年度（2004）は、飛鳥宮跡の正殿の規模・構造が確認された。前年度の石敷広場の北で東西8間、さらに両側に廊下で繋がった脇殿がある（榎考研2008a）。島庄遺跡でも昨年に引き続き、建物群の範囲が広範囲に広がることが確認されつつある（明日香村2008a）。御園アライ遺跡では、すでに隣接地で多くの掘立柱建物群が確認されていたが、本年度も建物群が確認された。飛鳥時代の宅地構造の一端を伺わせる調査事例である（明日香村2006b）。観堂寺遺跡では大壁建物やオンドルが確認されている（高取町2006a・2007a）。寺院関係の調査では、川原寺中金堂の北西で礎石建物が確認された。鐘楼もしくは経楼と推定され、その下層からは?仏も出土している（奈文研2006a）。また、坂田寺跡では、現道下に下水道管を埋設するにあたり、平成10年度の延長部を調査、回廊の基壇と礎石を確認した（明日香村2006b）。キトラ古墳では、石室内に入り、石室床面の調査を実施した。堆積土を土ごと搬出し、その後室内での箱庭発掘を実施した。しかし、青龍・白虎壁画が壁面から剥離しており、極めて危険な状態であることも判明した。これを受け、検討会では緊急に取り外しを決定し、実施した。さらに石室内で微生物が繁殖、検討の結果、すべての壁画を剥ぎ取ることが決定した（奈文研2005a）。一方の高松塚古墳でも壁画保存環境が悪化しており、その究明のために、墳丘の周辺が調査された（奈文研2006b）。また、キトラ・高松塚古墳と同形態の石室をもつマルコ山古墳では、墳丘の西側を調査し、円墳と考えられていた墳形が多角形であることがわかった（明日香村2006b）。

平成17年度（2005）、飛鳥宮跡では前年度の正殿の北側で、同規模・同形態の正殿・脇殿がもう一組あることがわかった。これで、飛鳥宮跡中枢部の構造がほぼ確認されたことになる（榎考研2008a）。石神遺跡では引き続き北へ調査を継続しており、当年度も多数の木製品・木

筒が出土し、この中には「観世音経」木筒もある（奈文研2007a）。島庄遺跡の範囲確認調査は最終年度で、大型建物群周辺を広く調査した。さらに遺跡北辺は唯称寺川まで広がることが確認され、遺跡の範囲がほぼ把握された（明日香村2008a）。同じ頃、石舞台古墳のすぐ北東で大型柱穴と小規模な建物・柵を確認、石舞台古墳造営に伴う施設群と考えられている（榎考研2007a）。蘇我氏の邸宅にかかわると推定されている甘樫丘東麓遺跡は、公園整備にあたって試掘調査を行った。その結果、広範囲に遺跡が広がることが予想されたため、次年度から継続的な調査へと切り替えている（奈文研2006a）。観覚寺遺跡では大壁建物や方形池を検出。渡来系建物が集中する地域であることが明らかになりつつある（木場2006a）。また、飛鳥川上流域の栢森地区で河川改修に伴う調査を実施、縄文時代から中世に至る遺構・遺物を検出し、奥飛鳥地域の考古学的な様相の一端が明らかとなった（榎考研2007a）。一方、藤原宮跡では朝堂院地区の計画調査で、東第六堂を調査した。朝堂建物一つ分を一度に調査し、朝堂建築に伴う造営溝の検出をはじめ、建物の造営方法などの成果を得ている（奈文研2006a）。雷丘が公園整備に伴って、丘陵の上が調査された。中世山城に伴う堀割等を確認したが、建物遺構は削平のため未確認である。また、7世紀初頭の小規模な石室墳を確認、さらに5～6世紀の埴輪が出土することから、当該期の古墳も推定されることになった（奈文研2006a）。マルコ山古墳の西側にカツマヤマ古墳が存在する。これまでその実態は不明であったが、前年度からの調査により、7世紀後半の磚積石室墳であることが判明した。これまで類例の少ない形態の古墳であると同時に、過去の地震により、石室が崩壊していることも判明した（明日香村2007a）。

平成18年度（2006）は飛鳥宮跡では宮域北方を調査している。そこでは東西方向の大規模な石組溝が確認され、北限に関わる施設の可能性が指摘された（榎考研2011a）。この成果を受けて、次年度から飛鳥宮北辺の計画調査が始まる。石神遺跡の調査は、現県道に隣接する地域まで調査が及び、ここで7世紀中頃以降の山田道南側溝を確認した。これによって山田道の位置と設置年代が確定すると共に、7世紀前半の山田道の位置が大きな課題となった（奈文研2008b）。甘樫丘東麓遺跡では前年度の試掘成果を受けて、本格的な調査が始まった。特に、谷地形を棚田状に造成するための石垣が検出され、この地域の土地利用が明らかとなってきている（奈文研2007a）。また、明日香村は当年度より、飛鳥寺の北東に位置する竹田遺跡の調査を開始した。飛鳥地域では未解明の邸宅の解明に乗り出し、多くの建物群を検出している（明日香村2012a）。シロカイト遺跡は昨年の試掘を踏まえ、本調査を実施した（榎考研2008b）。藤原宮跡では東第四堂を調査した。これで朝堂建物の調査は、第五堂を除いて、一応の終了をみた（奈文研2007a）。寺院関連の調査では、飛鳥寺講堂が調査され、南西部の巨大な礎石が確認されている（奈文研2008b）。高松塚古墳は本年度から、石室解体に伴う発掘調査がはじまった。墳丘部を上から調査をしながら、石室を露出させるものである。この過程で古墳の築造技術や過程、さらに劣化原因の一因について解明をした（奈文研2007a）。西飛鳥の真弓ミスズ古墳では石室の遺存は良くなかったがミニチュアカマドが出土しており、渡来系の墳墓であることがわかった（明日香村2008b）。

平成19年度（2007）には、飛鳥宮跡の北辺を解明する調査がはじまった。前年度の東西石組溝の東への延長部を調査したが、予想に反して、掘立柱建物とバラス敷が確認された（榎考研2011a）。石神遺跡は東限を確認するため、北面大垣の東への延長を調査し、遺構の状況から東限の可能性が指摘された（奈文研2008b）。島庄遺跡では、石舞台古墳を迂回する道路計画があり、平成17年度の榎考研の調査を加えて、さらに検討するデータを得るために石舞台古墳の北

平成13 (2001) 年度	<p>飛鳥宮跡 (東外柵内) [檀考研]・飛鳥京跡苑池 (中島・北方水路) [檀考研]・酒船石遺跡 (西部の石組溝・湧水施設周辺・丘陵の石垣) [明日香村]・飛鳥宮ノ下遺跡 [明日香村]</p> <p>石神遺跡 (北限塀) [奈文研]・清水谷遺跡 (大壁建物) [高取町]</p> <p>藤原宮跡 (大極殿院東回廊) [奈文研]・左京七条一坊 (中務省関連木簡) [奈文研]</p> <p>飛鳥寺跡(北面大垣) [明日香村]・岡寺跡 [檀考研]</p> <p>植山古墳 [檀原市]・キトラ古墳 (石室写真) [文化庁ほか]</p>
平成14 (2002) 年度	<p>酒船石遺跡 (東端石垣・石組水路) [明日香村]・石神遺跡 (具注曆木簡) [奈文研]</p> <p>ホラント遺跡 (石敷) [檀考研]・森カシ谷遺跡 [高取町]・安倍寺遺跡 (山田道) [桜井市]</p> <p>藤原宮跡 (東第二堂・東門) [奈文研]</p> <p>坂田寺跡 (北辺) [明日香村]</p> <p>キトラ古墳 (墓道前半) [文化庁ほか]・細川谷古墳群(馬場頭) [明日香村]・与楽乾城古墳 [高取町]</p> <p>金銅製四環壺 [奈文研]・宮内庁]・雷丘東方遺跡 (年輪年代) [明日香村]</p>
平成15 (2003) 年度	<p>飛鳥京跡 (正殿前石敷・北方南北水路) [檀考研]・酒船石遺跡 (東端石垣) [明日香村]</p> <p>島庄遺跡 (建物群) [明日香村]・ホラント遺跡 (石敷・大壁建物) [檀考研]・観覚寺遺跡 (大壁建物) [高取町]・森カシ谷遺跡 [高取町]</p> <p>藤原宮跡 (朝堂院南東隅・東第三堂) [奈文研]・藤原京左京一・二条四坊 [檀原市]</p> <p>川原寺跡 (北面大垣・工房) [奈文研]</p> <p>キトラ古墳 (墓道後半) [文化庁ほか]</p>
平成16 (2004) 年度	<p>飛鳥京跡 (南正殿) [檀考研]・島庄遺跡 (建物群) [明日香村]</p> <p>御園アライ遺跡 (建物群) [明日香村]・観覚寺遺跡 (大壁建物・オンドル) [高取町]</p> <p>藤原京右京北六条五坊 (北六条大路) [檀原市]</p> <p>川原寺跡(礎石建物) [奈文研]・坂田寺跡 (基壇建物・回廊) [明日香村]</p> <p>キトラ古墳 (石室内) [文化庁ほか]・高松塚古墳 (墳丘周辺) [文化庁ほか]</p> <p>マルコ山古墳 (墳丘西側) [明日香村]</p>
平成17 (2005) 年度	<p>飛鳥宮跡 (北正殿) [檀考研]・石神遺跡 (観世音寺木簡) [奈文研]</p> <p>島庄遺跡 (南部建物群・北部) [明日香村]・甘樫丘東麓遺跡 [奈文研]</p> <p>シロカイト遺跡 [檀考研]・雷丘 [奈文研]</p> <p>藤原宮跡 (東第六堂) [奈文研]</p> <p>カヅマヤマ古墳 [明日香村]・島庄遺跡 (石舞台大柱穴) [檀考研]</p>
平成18 (2006) 年度	<p>飛鳥宮跡 (宮域北方) [檀考研]・藤原宮跡 (東第四堂) [奈文研]</p> <p>石神遺跡 (山田道) [奈文研]・甘樫丘東麓遺跡 (石垣) [奈文研]</p> <p>竹田遺跡 (建物群) [明日香村]・観覚寺遺跡 (大壁建物・方形池) [高取町]</p> <p>飛鳥寺跡(講堂) [奈文研]・シロカイト遺跡 [檀考研]</p> <p>高松塚古墳 (解体・墳丘) [文化庁ほか]・真弓ミスズ古墳 [明日香村]</p>
平成19 (2007) 年度	<p>飛鳥宮跡 (宮域北辺) [檀考研]・石神遺跡 (東限) [奈文研]</p> <p>島庄遺跡 (石組溝) [明日香村]・甘樫丘東麓遺跡 [奈文研]</p> <p>竹田遺跡 (建物群) [明日香村]・観覚寺遺跡 (大壁建物) [高取町]</p> <p>藤原宮跡 (大極殿南門) [奈文研]</p> <p>キトラ公園内遺跡 (金銅仏) [明日香村]</p> <p>高松塚古墳 (石室解体) [文化庁ほか]・真弓鑑子塚古墳 [明日香村]</p>

平成20 (2008) 年度	飛鳥宮跡 (宮城北辺) [榿考研]・石神遺跡 (瓦葺建物) [奈文研]・島庄遺跡 (大型柱穴) [明日香村]・甘樫丘東麓遺跡 (石敷) [奈文研]・キトラ公園内遺跡 [榿考研]・檜前遺跡群 (キトラ公園) [明日香村]・古宮遺跡 (山田道) [奈文研]・薩摩遺跡 (波田里長檜前主寸木簡) [榿考研] 藤原宮朝堂院朝庭 [奈文研] 檜隈寺跡 (工房) [明日香村]・飛鳥寺南方 [奈文研]・檜隈寺周辺 (キトラ公園) [奈文研] 阪田遺跡群 (古墳) [明日香村]・高松塚古墳 (墳丘) [文化庁ほか]
平成21 (2009) 年度	飛鳥宮跡 (内郭北接大型建物) [榿考研]・飛鳥宮跡 (北辺) [榿考研] 飛鳥寺西方遺跡 (石敷・土管) [明日香村]・藤原宮跡 (朝堂院回廊) [奈文研] 甘樫丘東麓遺跡 [奈文研]・薩摩遺跡 (池の木樋) [榿考研] 檜前遺跡群 (大壁建物) [明日香村]・檜前遺跡群 (建物群) [明日香村] 檜隈寺周辺 (L形カマド) [奈文研] 藤原宮跡 (朝堂院回廊) [奈文研] 高松塚古墳 (墳丘) [文化庁ほか]・真弓テラノマエ古墳 [明日香村] 市尾遺跡 (大壁建物) [高取町]・菖蒲池古墳 [榿原市]・阿部山遺跡群 (古墳) [明日香村]
平成22 (2010) 年度	飛鳥京跡苑池 (北池) [榿考研]・水落遺跡 (北辺) [奈文研] 飛鳥寺西方遺跡 (石敷) [榿考研]・檜前遺跡群 [明日香村] 藤原宮跡 (朝堂院朝庭) [奈文研] 檜隈寺周辺 [奈文研]・川原寺裏山遺跡 [明日香村・関西大学] 植山古墳 (掘立柱塀) [榿原市]・菖蒲池古墳 (方墳) [榿原市] 牽牛子塚古墳・越塚御門古墳 [明日香村]

第2表 飛鳥地域主要発掘一覧表 (2001~2010)

方の調査をした。ここでは飛鳥時代の石組溝や、細川谷古墳群を構成する小古墳を検出した (明日香村2009a)。甘樫丘東麓遺跡では、谷奥の北西部で、塀によって区画された一画が判明した。しかし、この中には総柱建物等はあるものの、邸宅中心部の遺構はみられない (奈文研2009a)。竹田遺跡では前年に引き続き建物群が確認されている (明日香村2012a)。また、本年度より国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区整備に伴う調査が始まった。調査開始直後、檜隈寺の北西の谷より、小金銅製仏像の手が出土している (明日香村2013a)。一連の調査は、その後奈良文化財研究所・榿原考古学研究所・明日香村教育委員会によって、平成25年度まで継続されることになった。一方、藤原宮跡では大極殿院南門が調査された。東西7間という門構造が明らかとなったと同時に、富本銭を埋納した地鎮祭の跡が確認された (奈文研2008b)。古墳の調査では高松塚古墳の石室解体に伴う調査が継続している。本年度は石室の解体が始まり、石室の構造が子細に判明した (奈文研2008b)。また、前年度から開始していた真弓鐘子塚古墳を調査し、墳丘規模や石室構造・時期を確認、東漢氏の首長墓と推定された (明日香村2010a)。

平成20年度 (2008)、飛鳥宮跡の調査は、宮域推定北辺で前年に確認していた調査区を拡張し、建物の構造を把握した。また、西よりの調査区では石組溝を推定位置で検出し、建物との関係が目される (榿考研2011a)。石神遺跡では前年度に続き、東限の調査を行い、遺構変遷が明らかになり、さらに迎賓館以前の7世紀前半の瓦葺建物の存在を確認した (奈文研2009a)。島庄遺跡では旗竿状の大型柱穴を2基確認した。平成17年度に榿原考古学研究所が確認した大

柱穴の延長上である（明日香村2010b）。甘樫丘東麓遺跡では谷の入口近くを調査した。ここでは丘陵の裾に石敷が広がっており、また、遺跡の年代を推定できる土器群も出土した（奈文研2010a）。前年度からはじまっていたキトラ国営公園の調査は、奈良文化財研究所と橿原考古学研究所も参画して調査が継続している。檜隈寺跡では丘陵斜面地で掘立柱遺構を確認、檜隈寺関連施設が展開していることがわかった（奈文研2009a・橿考研2009a）。さらに北西部で、檜隈寺にかかわる工房跡が見つかった（明日香村2013a）。また、檜隈寺とは谷を隔てた南の尾根上で、掘立柱建物群が確認された。東漢氏の邸宅と考えられ、邸宅と寺院のセットが考えられた（明日香村2013a）。古宮遺跡では7世紀前半の山田道北側溝が確認され、古道の整備時期を考えるデータを得た（奈文研2010a）。藤原宮跡の調査は、朝庭部分の調査に移った。大極殿院南門の南隣接地の下層で、造営運河跡やその支流が確認された。これによって、藤原宮の造営過程が解明されてきている（奈文研2009a）。石舞台古墳の上流の阪田遺跡群では、これまで未確認であった横穴式石室墳が確認されている（明日香村2010b）。終末期古墳では、高松塚古墳の解体調査が終わり、仮整備のための墳丘及びその周辺の調査が次年度にかけて行われた（奈文研2009a）。また、阿部山遺跡群では、ほ場整備計画の是非判断のための調査を丘陵部で行い、木棺墓や中世墓を確認している（明日香村2010b）。

平成21年度（2009）、吉野川分水路改修に伴う飛鳥宮内郭の北接する調査では、大型の柱穴が多数見つかった。限られた範囲の調査ではあったが、復元するとエビノコ大殿に匹敵する建物となり、極めて格式の高い施設であることが判明した（橿考研2011b）。飛鳥宮の北辺を確認する調査は本年が最終年度となる。東西石組溝と飛鳥寺南辺の石敷広場の間を調査した。石組溝が真東西であるのに対して、飛鳥寺南辺石敷広場は西で北に8°振れている。この間の空間も8°振れており、この地区の性格が注目された（橿考研2011a）。一方、槻樹の広場と推定される飛鳥寺西方遺跡では、前年度から計画調査が始まっている。今年度は、以前に確認されていた土管暗渠や石敷の延長部が確認され、これまでの成果を追認している（明日香村2011a）。甘樫丘東麓遺跡では、丘陵上部にも柵列が確認され、関連する遺構があることが判明した（奈文研2011a）。高取町の薩摩遺跡では、奈良時代の池跡と木樋の一部が検出され、ここから「波田里長檜前主寸」木簡が出土している（橿考研2010a）。キトラ国営公園に伴う調査では、明日香村内としては、はじめて大壁建物が確認され、大壁建物から掘立柱建物への変遷も明らかとなっている（明日香村2013a）。さらにこの隣接地でも、近隣公園整備に伴う調査で、掘立柱建物群がみつき、檜前遺跡群の重要性が注目された（明日香村2011a）。渡来系の遺構は、檜隈寺の隣接地でもみつき、L形カマドをもつ竪穴遺構がある（奈文研2010a）。檜隈寺創建前史を語るものである。また、檜隈寺に関わっては、講堂北方の尾根上で、建物が確認されている（橿考研2010）。藤原宮跡では朝堂院回廊と大極殿院東回廊の接続部を確認し、朝堂院区画の構造が判明したと同時にその造営過程が判明した（奈文研2010a）。古墳の調査では、高松塚古墳の墳丘調査が継続している（奈文研2010a）。これら一連の調査によって平成21年には墳丘が復元整備されている。また、真弓地区ではカズマヤマ古墳に続き、磚積石室をもつテラノマエ古墳が確認された。終末期古墳の形態の一例が増えたことになる（明日香村2011a）。阿部山遺跡群ではカイワラ1・2号墳が確認され、ミニチュアカマドが確認されている（明日香村2011a）。橿原市では、菖蒲池古墳の墳丘部の調査が開始され、段築があることが判明した（橿原市2011）

平成22年度（2010）は、平城遷都1300にあたる年である。奈良県内ではこれにかかるイベント事業が数多く実施された。平成10年度にはじめて確認された飛鳥京跡苑池が復元整備される

ことになり、その基礎資料を得るために、発掘調査が始まった。今年度は北池の北東隅を確認し北池の形状が確定した。また、北池の東側はバラス敷が広がっている（榎考研2011c）。水落遺跡では、これまで旧飛鳥小学校の校舎があったため、未調査であった地域を調査した。水落遺跡からのびる木樋・銅管跡などを確認し、石敷も検出した。この調査によって、水落遺跡と石神遺跡の間をつなぐことができた（奈文研2011a）。藤原宮跡では再び朝庭部の調査を行い、造営運河や別の支流を検出し、造営方法を伺う成果といえる（奈文研2011a）。檜前遺跡群では公園造成による調査によって、建物群がさらに検出され、遺跡の全貌が確認された（明日香村2012b）。檜隈寺周辺では整地層が複数確認され、遺跡の変遷を時期的に追える成果を得ている（奈文研2011a）。川原寺裏山遺跡は、昭和49年の調査で?仏をはじめ大量の遺物が出土した。この出土遺物を関西大学が再整理するにあたり、関西大学と明日香村が合同で既調査地を再発掘をすることになった。これにより、不明であった埋納土坑の状況を確認した（明日香村2012b）。古墳の調査では、植山古墳の整備に伴い、古墳周辺部を調査した。これまでに確認されていた、古墳を囲む掘立柱塀がさらに続くことが判明した（榎考研博物館2011）。また、菖蒲池古墳は墳形が方墳であることを確認し、さらに地震によって、墳丘南西隅がずれていることも判明した（榎原市2012）。この年、最も注目を集めたのは牽牛子塚古墳である。前年度から継続で行われていた調査によって、三段築成の八角形墳であることが判明し、本来は凝灰岩切石によって化粧されていた。さらに石槨を囲むように安山岩切石が囲む構造も確定した。また、すぐ前方から、これまでまったく知られていなかった終末期古墳が発見された。鬼の俎雪隠型の石槨をもつ。これによって齊明天皇陵と大田皇女墓の可能性が高まった（明日香村2013b）。

小 結

この10年間の発掘成果を概観すると、まず、前10年から継続調査が注目される。それは酒船石遺跡や飛鳥京跡苑池である。いずれも、前段階に新たに確認された遺跡・遺構で、新しい飛鳥像を描き出す成果であった。そして、飛鳥宮跡の中核部の調査や北限の探索や石神遺跡の規模の確定と山田道の確認は、都市飛鳥の構造復元に重要なデータとなった。さらに藤原宮の朝堂院地区の継続調査によって、飛鳥から藤原京への発展も理解できるようになった。

このような調査の中でも、この時期、終末期古墳の調査が進んでいる。それはキトラ古墳・高松塚古墳の壁画保存に関わるものである。この二つの古墳の調査によって、終末期古墳の構造・築造過程が解明されてきたのである。もうひとつの契機は、世界遺産登録へ向けて真弓鑑子塚古墳や牽牛子塚古墳・菖蒲池古墳などの調査が行われた。

このようにこの10年間は宮都及び古墳関係の調査が多く実施され、この成果に伴って、次章以降で記すように多くの研究が進んだ時期でもある。

Ⅲ. 遺跡研究

宮都論

宮都研究は飛鳥宮跡（伝承飛鳥板蓋宮跡）の中核部の学術調査と北辺部の調査によって、この10年間に研究が深化した。すでに、飛鳥宮跡は大きくⅠ～Ⅲ期の3時期に重なる宮殿遺構があり、さらにⅢ期は2小期に区分できることが判明している。Ⅰ期を飛鳥岡本宮、Ⅱ期を飛鳥板蓋宮、ⅢA期を後飛鳥岡本宮、ⅢB期は飛鳥浄御原宮に比定し、ほぼ同じ位置に「飛鳥宮」が継続して造営されたことがこれまでの研究から定説化している。これについて、これまでの

積極的・体系的な研究を一書にまとめたのが小澤毅・林部均である（小澤2003a・林部2001a）。さらに飛鳥宮跡中枢部の正式報告書である『飛鳥京跡Ⅲ』において、調査担当機関である榎原考古学研究所も上記の内容を支持している（榎考研2008a）。ただし、この宮殿比定に対して反論する意見もある（今尾2007・西本2004）。飛鳥宮跡中枢部の発掘調査によって、内郭の建物配置・構造が確定した。中軸線上には、内郭南門の北に、正殿級の建物が3棟並ぶ配置をしている。これらの成果を受けて、調査担当者であった林部はこれまでの一連の研究をさらに進め、古代宮都研究の中での飛鳥宮の位置づけに言及していくことになる（林部2002・2003a～c・2005b～f・2006a・2008ab・2009）。

大極殿の成立時期については諸説があるが、林部は飛鳥浄御原宮のエビノコ大殿を大極殿とみて、その背景に天命思想があると指摘した（林部2005e）。一方、積山洋は前期難波宮を中心として、宮殿の正殿としての多角的な検討から、大極殿の成立を前期難波宮とみる（積山2002・2009）。同様に家原圭太も朝堂の正殿として、前期難波宮で大極殿が成立していたと説く（家原2005b）。これらのテーマは、近年積極的に研究会を実施している奈良女子大学の都城制研究集会でも第1回目のテーマとして「大極殿の成立」が取り上げられた。林部はさらに小墾田宮の構造についても、飛鳥宮跡の調査成果を踏まえて、文献史料の再検討を行い、岸俊男とは異なる朝堂院の伴わない復元案を提示した（林部2001d）。また、大極殿だけでなく、これら古代宮都の中枢部の変遷を追いながら、内裏・大極殿・朝堂院の変遷と位置づけをおこない、その定義や視点によって大極殿などの成立時期が研究者によって異なることを指摘し、大極殿・朝堂院の確実な成立は藤原宮にあると相原嘉之は指摘する（相原2010a）。

飛鳥宮域の内外における官衙については、亀田博が一定の整理を行っていた（亀田1997）。この研究成果に、その後の調査成果を踏まえて再検討したのは相原である。個別の遺跡については別に記すが、天武朝の飛鳥浄御原宮の内外には官衙群が配置されていた。その官衙建物の配置と官衙形態には2パターンあり、それが次の藤原宮の官衙配置や形態にも引き継がれていくことを示した（相原2003a）。同様に、飛鳥宮周辺の盆地内には、宮と官衙、寺院しかない政治空間であったことを北村優季も指摘している（北村2006）。水落遺跡は正式報告書が刊行され、様々な検討・研究が総括され、漏刻遺構であることが確定された（奈文研1995）。これに対しては、異論も唱えられている。漏刻遺構を主体とすることには変わらないが、第2の機能として、噴水石造物への導水施設と考えたのは黒崎直である（黒崎2001a）。また、熊谷公男は3度にわたる須弥山石立造の記事を石神A期の遺構変遷に対応するものとした（熊谷2001a）。さらに木下正史は水落遺跡の調査研究を踏まえ、漏刻の起源と変遷についての詳細な検討をしている（木下2003a）。水落遺跡の北側に広がるのは石神遺跡である。当該期においても、調査は継続されており、遺跡の規模・構造も明らかとなってきた。斉明朝については服属儀礼を行った迎賓館の性格が考えられている（木下2005a）。これに対して、重見泰は迎賓館の根拠のひとつとされていた新羅土器と黒色土器の時期的な検討から、斉明朝の迎賓館ではなく、中大兄皇子の宮と説き、壬申紀にみる小墾田兵庫も皇子宮にあったとする（重見2007）。天武朝については石神遺跡北方から大量の木簡が出土しており、仕丁にかかわる木簡をはじめ、天武朝の石神遺跡及びその周辺の性格を検討している（市2005a）。また、石神遺跡から出土していた瓦に注目し、斉明朝以前に瓦葺建物の存在を推測していたのは花谷浩である（花谷2004a）。この指摘は後の発掘で証明されることになった（奈文研2009a）。

酒船石遺跡の研究は、亀形石槽の発見により新たな展開をみせ、亀の造形から様々な諸説が

展開されていた。この時期も飛鳥の石造物の利用形態（相原2001a）や亀の思想などの検討が続いている（本位田2001・藤澤2001・門脇2002a・林2003・吉野2003a・和田2003a）。その中でも「亀」そのものを多角的に検討したのは千田稔・宇野隆夫をはじめとして企画された『亀の古代学』である。原始から現代に至るまでの歴史や、亀の生物学的な検討までなされている（千田・宇野2001）。また、遺跡そのものの検討としては、相原が当遺跡の性格を天皇祭祀の施設とみ、その祭祀内容を初期の大嘗宮と推定した（相原2003b）。同様に、鈴木千代乃も亀形石槽の水を『中臣寿詞』にある「皇御孫尊の御膳つ水」として、大嘗祭における聖水とみている（鈴鹿2005）。また、酒船石遺跡及び飛鳥東垣内遺跡の土木量を算出し、斉明紀にみる土木量との比較をおこなった研究もある（相原2008a）。平成4年から10年間、25次の調査成果については、その発掘調査の報告と様々な考察を踏まえた正式な報告書が刊行された（明日香村2006a）。これによって、酒船石遺跡が巨大な祭祀遺跡であることやその時期が斉明朝に造営がなされ、7世紀末まで利用されていたことなどが判明し、現段階での遺跡の内容と研究の到達点が示された。今後はこれらの成果を踏まえた研究の深化が望まれる。

飛鳥全体の都市空間を時空間として捉えた研究は、相原・阿部義平に続いて、林部も行っている（相原1993・阿部1997）。飛鳥地域の発掘成果はめざましく、特に、飛鳥宮の時期的な変遷も判明してきた。林部は時期における遺跡の広がりだけでなく、遺構の方位にも注目し、皇極朝以降に正方位になることに着目した（林部2003ab・2008a）。これらに対して、飛鳥地域に方格子地割があったと推定したのは黒崎である。方格子地割はこれまでも提示されたことがあるが、黒崎は2時期の規格の地割があり、これを時期差とした（黒崎2005a・2005b）。その集大成として『飛鳥の都市計画を解く』を刊行している（黒崎2011）。これに対して井上和人は反論を加えており、飛鳥には方格子地割はないと結論づけている（井上2007）。

飛鳥地域の宅地については、林部は飛鳥地域の周辺遺跡群を類型別に識別し、皇子宮や豪族の邸宅に政治にかかわる諸部門が分散されており、いわゆる官衙的な遺跡はまだ少ないとした（林部2001b）。発掘調査では、飛鳥周辺の古道についても大きな成果をあげていた。特に、中ツ道については藤原京期に拡幅する東四坊大路があり、拡幅前の道路を中ツ道又はその延長としたことを露口真広は検討しているが（露口2004）、これに対して井上は、この道路は東四坊大路であり、藤原京期の中で拡幅されたものと批判する（井上2004a）。また、中ツ道を含む奈良盆地の三道について、7世紀前半に官道として整備され、下ツ道が基準で等間隔に三道が設置され、その基準となったのは丸山古墳であるとしたのは小澤である（小澤2002a）。山田道の位置については、石神遺跡の調査と立地・地形から、石神遺跡北辺の位置と推定した（西口2001）。これについては石神遺跡の調査で山田道側溝が、現県道の下で確認され、少なくとも7世紀中頃以降の山田道が確定し、同時に7世紀前半の山田道の位置が課題となった（奈文研2008b）。これらの道路を含め、発掘調査で確認された道路遺構を集成・検討したのは近江俊秀である（近江2006・2009a）。

飛鳥東垣内遺跡の大溝が斉明紀の狂心渠と考えられることや、藤原宮の下層での造営運河の構造から、飛鳥藤原地域の水運利用を検討したのは木下正史と千田稔である（木下2001・2004・2007・千田2004a）。平成15年度からは、鳥庄遺跡の調査が3年計画ではじまり、また、平成17年度から甘樫丘東麓遺跡の調査が始まった。両遺跡は蘇我氏の邸宅として注目されたが、これらの成果を踏まえ、現状の到達点と課題を提示したのは相原である（相原2007a・西川編2009）。そして、蘇我氏関連遺跡の調査を踏まえ、蘇我氏そのものに関する研究も深化している（遠山

2008)。

飛鳥地域における防衛施設については、阿部義平が早くから指摘しており(阿部1997)、当該期にも言及している(阿部2002)。その後、平成14年度に高取町森カシ谷遺跡の調査成果と、飛鳥東方丘陵上に大規模な掘立柱塀が調査されたことを受け、相原嘉之は飛鳥を囲む羅城的施設を想定、さらに烽による飛鳥の防衛体制を史料を踏まえて検討した(相原2004a)。

都城論

当該年間において、藤原宮朝堂院地区の発掘調査が進み、朝堂と朝庭部の構造、宮の造営過程が解明されてきた。しかし、藤原宮そのものを対象とした研究は少ない。この中で、相原嘉之は飛鳥地域の官衙との比較において、藤原宮の官衙配置と性格について検討した。飛鳥からの延長で、宮域に官衙を集約し、次の平城宮・平安宮への構造起点とした(相原2003a)。同じく、木下正史も藤原宮の掌握官衙の特定を、発掘調査の成果を踏まえて検討している(木下2003b)。さらに出土木簡からアプローチしたのは市大樹である(市2010a)。

これらに対して藤原宮・京の造営過程と年代について、林部は出土土器から、藤原京の先行条坊の施行年代を天武5年に特定をした。また、宮域から遠い四条遺跡や土橋遺跡(西十坊)の事例から、藤原京期になってから条坊が施行されることも確認している。林部の藤原京研究は四条遺跡の調査担当になったこと飛鳥宮の研究にはじまる。その中で条坊施行の時期について検討した(林部2001c・2010a)。これらについては、当該年間における朝堂院地区の調査で、2時期の先行条坊や朝庭下層における造営運河の検出によって、造営過程の特定がある。特に、大極殿南門において地鎮と考えられる富本銭埋納遺構の検出は重要である。

藤原京の京域については、すでに小澤毅と中村太一が唱える、宮を中心におく十条十坊の正方形の京域が定説化している。そして、その設計理念には周礼考工記があるとする(小澤1997・1998、中村1996・1999)。しかし、京域のうち南辺の山間部については未だ確認されておらず、また、京域の拡大・縮小についても確認はされていない。その中で林部は、条坊施行が理念をもとにされたのではなく、不正形な条坊が施行されたとみる(林部2003a・2004a・2005d・2006b・2007a)。また、周礼考工記と藤原京の構造が類似するとされるが、本来比較検討しなければならないのは、周礼考工記と藤原宮であることを指摘するのは豊田裕章である(豊田2007)。藤原京の条坊については、発掘されたデータから、その造営方位や精度について詳細な検討を入倉徳裕がしている(入倉2008)。これらに対して、小澤は南辺の山間部には実際の条坊施行は困難な部分もあるが、陵墓や「軽坊」木簡から十条であったこと、宮域は立地や官道、本薬師寺と小山麿寺との関係から、当初から決定されていたと反論した(小澤2003b)。

京域にかかわっては、施行範囲だけでなく、京内の諸施設の検討も進んでいる。藤原京の宅地については、竹田政敬が宅地班給規定と発掘調査における成果を検討し、大規模宅地から細分された宅地まであり、班給記事と対応するとした(竹田2003a)。同様に、飛鳥藤原地域の宅地遺構を家原圭太も検討している(家原2005a)。玉田芳英は藤原京左京六条三坊の四町宅地について、概報とは異なる変遷案を検討、藤原京における大規模宅地の事例を検討した(玉田2005)。また、藤原京の景観を条坊道路の交差方法や橋・区画施設・建物柱掘形規模などの検討から藤原京の都市景観のイメージ像をつくりあげた研究もある(竹田2008)。

また、井上和人は藤原京から平城京遷都の歴史的な背景について検討した。藤原京の形状については、小澤説を支持し、その延長上に平城京を置く。遷都の直接的な理由として、遣唐使のもたらした唐長安城の情報とし、両京の比較によって、この点を裏付けている(井上2003・

2004b・2006a・2008a)。阿部義平は藤原京と平城京の類似点と相違点を指摘し、そのなかでの平城京の形制について検討している(阿部2003・2006)。また、飛鳥から藤原京へ変遷の中で、藤原京を701年の大宝律令を境に前後に分け、前半は飛鳥地域と一体となって機能し、後半段階になって藤原京として確立したと林部は説く(林部2010bc)。

この時期の都城研究において二つの研究会は注目される。都城制研究会は長らく休止していたが、平成18(2006)年に新たに活動を再開した。ここでの研究報告は現状での最新成果と研究の到達点を示していることは重要である。また、奈良女子大学で開催される都城制研究集会も様々なテーマで行っている。

苑池論

当該期の苑池研究は、平成11年度に確認された飛鳥京跡苑池が契機となる。大正年間に出土した「出水酒船石」の他に、新たに二つの石造物が原位置で出土し、広大な苑池が確認された。その後、苑池の調査は平成13年度まで継続され、苑池は南池と北池、そしてそこから伸びる水路で構成されることが明らかとなった(樞考研2012)。苑池の調査はしばらく中断していたが、苑池の復元整備に伴って、平成22(2010)年度から調査が再開されている。

苑池の時期ごとの集成及び検討は、奈良文化財研究所が研究会を平成13年度から実施しているが、飛鳥時代の庭園研究会の報告が『古代庭園に関する調査研究報告書』『古代庭園研究Ⅰ』として刊行されている(奈文研2003d・2006c)。金子裕之は『古代庭園の思想』で、庭園や嶋の語義や源流から検討し、飛鳥・奈良時代の庭園を検討、飛鳥時代に苑池がはじまるとした。そして、その思想的背景には、東アジア世界からもたらされた神仙思想があるとした(金子2002)。同様に、千田稔も苑池を神仙思想との関係で捉えている(千田2001a)。水野正好は古墳時代から奈良時代の苑池遺跡を城之越遺跡から紐解き、泉源饗宴から庭園への流れを概説しながら、その宗教的な要素を提示した(水野2002)。相原嘉之は、高瀬要一・清水眞一の研究を踏まえ(高瀬1998・清水1999)、飛鳥時代の方形池を3類に、曲池を2類に細分類し、その変遷と性格について言及した(相原2002a)。一方、小野健吉は、飛鳥から奈良時代の苑池を検討し、方形池は百濟、曲池は唐の影響が強いとし、その画期を奈良時代の平城宮東院庭園にみる(小野2003a)。飛鳥京跡苑池の調査担当でもあったト部行弘は、苑池の課題点を整理し、苑池を専用・付随・蓮池の3タイプに分類できるとした(ト部2006)。また、すでに河上邦彦が指摘していたが(樞考研2002)、飛鳥京跡苑池を内苑、嶋宮を外苑的機能があったと説く(ト部2008)。

小野は苑池における庭園の機能以外に、東アジアの禁苑にみる囿で奇禽珍獣が放飼されていることから、飛鳥京跡苑池にも、囿があったと説く(小野2003b)。また、庭園のはじまりから現代に至るまでの庭園について概括し、その意味を問い、今後の保存への提言も行っている(小野2009)。そして、発掘庭園を中心に概観したのは田中哲雄である。田中は庭園の語源から、発掘調査で確認された庭園遺構を読み解いていく(田中2002)。飛鳥京跡苑池を中心とした飛鳥の庭園については樞原考古学研究所附属博物館で『飛鳥の苑池』が開催され(樞考研博物館2003)、さらに東アジアの庭園を含めた展覧会を飛鳥資料館で『東アジアの古代苑池』が開催された(飛鳥資料館2005b)。

寺院論

当該年間については、前段階に比べて寺院跡の大きな調査は少ない。しかし、小規模でも飛

鳥寺跡・岡寺跡・坂田寺跡・川原寺跡、そして檜隈寺跡の調査がある。さらに、長年調査された山田寺と吉備池廃寺の正式報告書が刊行されたことは注目される。

山田寺の報告書では、伽藍の遺構変遷と山田寺の歴史が明瞭にリンクしていることが判明した(奈文研2002b)。また、吉備池廃寺のこれまでの議論を踏まえながら、考古学的な成果を交え、百済大寺とする理解は確定的となっている。この中で、まだ未確認の高市大寺について、大官大寺の西方の飛鳥川までにあるとしている(奈文研2003b)。これに対して、百済大寺から大官大寺までの歴史や遺跡について詳細に検討したのは木下正史である。そこでは高市大寺を木之本廃寺に推定している(木下2005b)。東北大学で開催された東アジアの塔基壇を中心テーマとした研究会で、小澤毅・熊谷公明が東アジア的な視点をもとに検討している(小澤2005a・2006・熊谷2005・2006)。

飛鳥地域の古代寺院について、出土瓦から造営氏族を推定する一連の研究をしているのが小笠原好彦である(小笠原2005a)。この中で、小山廃寺は、紀寺や高市大寺などに比定する見解がださていたが、小山廃寺が藤原京条坊に規制されていることと、出土瓦が紀氏の本拠地である地域にみられないことから、疑問を呈しており、出土瓦から、天武9年に天武不弔に対して、藤原氏によって新造され寺院と推定した(小笠原2004)。また、奥山廃寺・川原寺・本薬師寺などの古代寺院の瓦窯が宇智郡に多くみられ、その理由を水路・陸路の交通路が重要であったと指摘した(小笠原2003a)。発掘成果を踏まえ、独自に軽寺とその周辺の遺跡について検討したのは大脇潔である。大脇は軽寺が7世紀中頃に創建された四天王寺式伽藍であることは判明するが、その造営氏族はいくつか推定され、現状では特定できないとした。また軽寺の東の谷に「軽池」が推定出来るとした(大脇2005ab)。同じく軽寺を検討した笈和也は、創建年代を瓦と立地から7世紀中頃とみ、造営氏族は特定出来ないものの、軽部臣をその第一候補とした(笈2008)。

これら飛鳥地域の寺院について、総括的・概説的に紹介したものがある(大脇2010・小澤2010a)。さらに大脇は出土文字史料から寺院名を整理し、古記録にはない生史料としての価値がその信憑性を強めている(大脇2007)。また、古代寺院の軍事的要素に注目したのは甲斐弓子である。甲斐は飛鳥の寺院を含め、掘立柱塀によって囲まれた古代寺院に軍事的な要素が強いとし、その背景なども含めて検討している(甲斐2010)。

工房論

飛鳥寺南東の飛鳥池工房の遺構・遺物は、飛鳥時代の総合工房として、生産品目の多様性もさることながら、その生産工程や運営システムまでを復元し得る点で重要であり、それは律令制成立過程の生産システムとして注目できる。この現地調査は終了し、当該期は遺物の整理がなされてきた。ここから出土した遺物の個別研究は別に記すとして、ここでは工房遺跡の研究について概観しておきたい。

飛鳥池工房の性格について、寺崎保広は出土遺物の多様さと操業規模を踏まえ、さらに出土した木簡群から分析した。木簡群には寺院に関するもの、天皇・宮廷に関するもの、工房に関するものがあることから、飛鳥池工房は宮廷が管理した工房と位置づけている(寺崎2001a)。これに対して吉川真司は、寺崎が指摘した3種の木簡群のうち、天皇・宮廷に関するもの、工房に関するものは確実とはいえ、いずれも寺院に関わるものとして、飛鳥寺にかかわる「造飛鳥寺官」とみた(吉川2001)。さらにこれに対する寺崎の反論もある(寺崎2005)。一方、杉

山洋は、飛鳥池工房が飛鳥寺東南禅院に附属する工房とみて、富本銭も生産量は少なく、飛鳥寺の珍宝としての性格を推定した（杉山2002）。松村は、杉山の事実誤認や検討の問題点を指摘し、これに反論している（松村編2003）。飛鳥池遺跡の木簡群の正式報告書が平成19年に『飛鳥藤原京木簡一』として刊行された。その木簡の分析の中で、工房の本格的な操業は天武7年頃であり、藤原京遷都に伴って本格操業を終焉されるとする。さらに生産体制やその工人組織についても解明している。そして、天皇・国家直属の工房として機能したと結論付けた（奈文研2007b）。

平成15年度に川原寺北辺地域において、寺院工房が確認された。ここでは鉄釜が铸造されている（奈文研2004b）。また、平成20年（2008）度には檜隈寺の北西で寺院工房を確認している（明日香村2013a）。これら二つの工房は寺院工房として、先の飛鳥池工房と比較検討が注目される。清岡廣子は、飛鳥京跡から出土した漆壺の分析から、漆の流通体制について検討した（清岡2002a・2005）。

古墳論

この時期の古墳調査は真弓丘陵にある与楽乾城古墳、真弓籬子塚古墳、真弓ミスズ古墳と阪田遺跡群などの後期古墳と菖蒲池古墳、白壁塚古墳、マルコ山古墳、カヅマヤマ古墳、真弓テラノマエ古墳、牽牛子塚古墳などの終末期古墳の調査がある。しかし、最も注目された調査はキトラ古墳と高松塚古墳の調査であろう。これらの調査によって、後終末期古墳の実態が明らかとなり、研究の深化が進んだ。

この時期も五条野丸山古墳をはじめとする五条野古墳群の研究が進んでいる。丸山古墳の被葬者については確定していない。それは当該期でも変わらない。丸山古墳を蘇我稲目墓とするのは、既に和田萃の指摘にもあるが、小澤毅は推古28年の砂礫の存在、大柱の存在、檜隈墓の存在、地名などから、梅山古墳を欽明天皇陵として、丸山古墳は蘇我稲目墓とみる（小澤2002a）。和田萃も欽明天皇陵について再論している（和田2005a）。竹田政敬は丸山古墳を含め、五条野古墳群について蘇我本宗家の墓域とし、西から蘇我稲目（丸山古墳）、推古天皇・竹田皇子（植山古墳）、蘇我蝦夷・入鹿（宮ヶ原1・2号墳）、蘇我倉山石川麻呂（菖蒲池古墳）と推定した（竹田2001）。さらに西光慎治は、五条野古墳群の南に並ぶ、欽明天皇陵を梅山古墳とし、その東にあるカナヅカ古墳を吉備姫王の檜隈墓、さらに鬼の俎雪隠を斉明初葬墓、そして天武持統陵と皇統譜が並ぶとする（西光2002a）。

一方、丸山古墳を欽明天皇陵とするのは高橋照彦である。高橋はこれまでの諸説を検証し、丸山古墳を欽明天皇陵、梅山古墳を敏達未完陵とした（高橋2004）。同様に、丸山古墳を欽明天皇陵とするのは白石太郎で、考古学成果を基本としながら、諸問題を検討している。まだ完全に課題が解決できたわけではないが、梅山古墳は蘇我稲目墓とみる（白石2009）。これら天皇陵についてその研究を大きく推進してきたのは今尾文昭である。今尾は天皇陵、特に7世紀代の天皇陵について「律令期陵墓」と称し、天皇陵を律令国家の中で位置づけている。その実態について様々な角度から検討している（今尾2006・2008）。さらに7世紀代の天皇陵の形態に用いられた八角形墳について、体系的に検討しており（今尾2005）、その後の牽牛子塚古墳の調査成果について重要な知見をもたらしている。律令期の喪葬体制について、山尾幸久は古代史の立場から検討している（山尾2005）。

来村多加史は古墳の立地する地形に注目し、風水思想にのっとり谷を兆域とす空間を墓域と

するとの理解をした(来村2004ab)。終末期古墳の立地について風水思想が関係していることは指摘されていた(河上2006a)が、その谷全体を墓域とする考えはなかった。

当該期にはキトラ古墳と高松塚古墳が調査された(奈文研2008a)。それは壁画の保存問題とも併行して進む。さらにマルコ山古墳の調査をはじめ終末期古墳の解明が進んだ。とくに、キトラ古墳・高松塚古墳・マルコ山古墳・そして石のカラト古墳を中心とした終末期古墳の調査成果の集大成として、飛鳥資料館で『飛鳥の奥津城』展が開催されている(飛鳥資料館2005a)。そこではそれまでの終末期古墳の成果を踏まえて、その系譜や造営時期などを展示を通して紹介している。カヅマヤマ古墳は、飛鳥ではめずらしい磚積石室墳である(明日香村2007a)。この石室材は結晶片岩であり、その時空間的な検討を西光は行っている(西光2004a)。

この時期、飛鳥地域の古墳調査と基礎的な資料集積を積極的に推進したのは西光である。西光は現状における基礎データとして、古墳の測量調査を継続している(西光2003a・2006a・2007・2009a・2010a)。これによって最新のデータが集成されつつあり、今後の古墳の保護の一助となる。それは、後にカヅマヤマ古墳や牽牛子塚古墳の発掘調査にもつながっていった。また網干善教はこれまでの古墳研究の集大成として、『終末期古墳の研究』として刊行した(網干2003d)。また、河上も『大和の終末期古墳』として刊行している(河上2004a)。

古墳壁画に関しては、キトラ古墳の石室内の調査進展が大きい。また、高松塚古墳古墳の解体に伴う調査で、新たな展開を見せた。高松塚古墳の調査以来、継続的に古墳壁画について研究してきた。網干は、高松塚古墳壁画の発見以降、東アジアの壁画を集成研究してきた。ここにキトラ古墳壁画が加わったのである。網干の研究はすべての壁画に及ぶ(網干2004b)。

玄武については、東アジアの玄武図を集成し、分類案を提示した(網干2001a・2003a・2005b・2006ab)。この時期、キトラ古墳で朱雀の発見を受けて、網干は東アジアの古代壁画や墓誌の朱雀図を集成を行い、朱雀像には、静止・歩行・顔頰・飛翔の4分類できるとし、キトラ朱雀は顔頰に含まれる(網干2002a・2003b)。上原和はキトラ古墳の朱雀図を高句麗や北齊墓にその祖型を求めている(上原2001)。キトラ古墳で注目されたもうひとつの壁画は天文図である。高松塚古墳でも星宿図は描かれていたが、キトラ古墳の天井には、より精密な東アジア最古の天文図が描かれていた。この天文図の同定と研究をしたのは宮島一彦である。宮島は描かれた天文図を詳細に検討している(宮島2001ab・2007)。この天文図をめぐる、松本剛は古代の天文信仰について言及している(松本2001)。また、キトラ天文図の描かれた背景として、飛鳥時代の天文学関係の記録と考古資料を集成し、その背景を検討した研究もある(相原2003c)。十二支像の確認で、岩瀬透は東アジアの十二支像の集成と系譜を検討した(岩瀬2002)。網干も十二支像の集成と系譜を検討し、キトラ壁画の位置づけを検討している(網干2003c)。同様に加藤真二や鐘方正樹なども東アジアの十二支像を検討した(加藤2005・鐘方2005・飛鳥資料館2006c)。さらにキトラ十二支像の持ち物に注目し、これを中国の武器である鉤鏃とした(網干2005a)。

古墳壁画全般については、全浩天がキトラ古墳壁画と朝鮮半島の壁画古墳の比較研究を行っている(全2001・2002)。また、百橋明穂も美術史的観点から古墳壁画の検討を試みた(百橋2005a・2007)。一方、高松塚古墳壁画の制作年代について、有賀祥隆は絵画の特色から8世紀初頭の時期を推定している(有賀2007a)。網干善教の教えを受けた来村多加史も壁画について詳細な検討を行っている(来村2005・2008)。林温は各壁画からその絵画史的な検討を加える(林2004ab)。高松塚古墳石室の解体にともなって、壁画を詳細に観察した増記隆介は壁画の下絵の痕跡を確

認し、キトラ古墳同様に壁画に下書きがあることを確認した。また、星宿図についても、新たな星の痕跡を確認している（増記2008）。

古墳壁画の学術的な研究は、2006年までで、ほぼ研究は収束し、この頃を境に壁画保存が大きな課題となってきた。キトラ古墳壁画については石室壁面から剥ぎ取られ、修理されるが、飛鳥資料館での壁画公開に合わせた各壁画の研究がなされた（飛鳥資料館2006a・2007a・2008a・2009a～2010a）。

飛鳥前史

当該期においても、飛鳥地域の飛鳥時代以前の遺跡の研究はあまり多くない。松田真一は飛鳥川上流域の稲渕ムカンダ遺跡について紹介し、吉野川の宮滝遺跡との関連について言及している（松田2004・2008）。また、山口卓也は稲渕ムカンダ遺跡を中心に、明日香村内の縄文遺跡を集成・概観する中で、稲渕ムカンダ遺跡の集落が、飛鳥川中流域の安定した居住が可能であったこととは対称的に、地形や時期的にみて継続的な集落ではないと指摘する（明日香村2006c）。また、大官大寺下層から出土していた縄文土器について、すでに概報で報告されていたが、これを再報告・検討している（加藤2009・石田2010a）。

弥生時代の飛鳥については、『大和の弥生遺跡 基礎資料Ⅰ』において8遺跡が集成されていた（大和弥生文化の会1995）が、これを基に清岡廣子がさらに集成・検討を行っている（清岡2004）。清岡は32遺跡を集成し、分析を加えている。また、相原は弥生時代の遺跡は檜前川沿にも一部見られるが飛鳥川沿いに展開しており、時期を追って、集落が形成されていくことが指摘できるとする（明日香村2006c）。さらに高橋幸治は、島庄遺跡から出土した紡錘車の編年的位置づけを行っている（高橋幸2005）。

藤原宮域では以前から埴輪の出土が知られていた。しかし、宮内において明確な古墳は確認されていなかったが、朝堂院地区の下層において、古墳の周溝と考えられる溝が確認され、埴輪が出土した。これらを含めて宮域出土埴輪の再整理を前岡が行っている（前岡2004）。

これら飛鳥時代以前の研究成果を紹介した「あすかー以前」展が飛鳥資料館で2002年に開催されている（飛鳥資料館2002a）。

その後の飛鳥

飛鳥時代以降の研究は多くはない。この中で、網干善教は飛鳥京の終焉を解明するために、坂田寺・川原寺・飛鳥寺・酒船石遺跡などの調査成果や史料から、12世紀末頃に伽藍焼失などによって、古代飛鳥の景観が無くなることを指摘した。これをもって古代飛鳥の終焉とみる（網干2004a）。これらにその後の調査成果を踏まえ、飛鳥時代以降、現在に至るまでの飛鳥地域の変遷を時期的に検討したのは相原嘉之である。相原も平安時代末から鎌倉時代初頭に大きな画期を見だし、ここに古代的景観の消失を指摘した。そして、現在の景観の原型を室町時代に位置づけている（相原2007b）。和田萃は飛鳥京跡苑池を含む、奈良時代の飛鳥について検討しており、天平神護元（765）年の大原・長岡・飛鳥川の巡暦を、大原と酒船石遺跡、そして飛鳥京跡苑池にかかわる記事とする（和田2001a）。

IV. 遺物研究

土器論

飛鳥地域の7世紀の土器論については、前期の10年に年代論が大きく注目されたが、当該期になるとその編年論は静まった。坂野和信は一連の編年論で、陶邑と飛鳥地域の須恵器では系列の違いがあるとみる立場をとった(坂野2002)。この土器のうち飛鳥Ⅲの指標となっている大官大寺下層土器群について、その全貌が報告された。これによって飛鳥Ⅱとの違いやこの土器群の特質が明瞭となってきた(西口・玉田2001・玉田2002)。

飛鳥地域出土の新羅土器については、すでに江浦洋・巽淳一郎の研究があるが(江浦1988・巽1998)、この時期、安田龍太郎が飛鳥藤原地域の新羅土器の集成と年代・出土遺跡を検討している。これにより飛鳥地域の新羅土器と遺跡との位置づけが明確になった(安田2002a)。さらに新羅土器の編年的な位置づけと大和出土の新羅土器検討し、その出土背景について検討したのは重見である(重見2005)。

瓦埴論

古代瓦の研究は、瓦を詳細に観察し、製作技法の変遷と系統関係を明らかにすることにある。これによって瓦の年代、瓦工の単位を把握し、畿内から瓦づくりがどのような経路で波及していったのか。どのような瓦工単位・集団を媒介しているのかを解明することができる。

当該年間では花谷浩が特色の少ない重弧文の分類と編年を行った(花谷2001a)。これらは山田寺の報告書においても反映されている(奈文研2002b)。平成15年、瓦研究の指針を作り上げた納谷守幸が亡くなられ、その研究の発端であった「花組」「星組」の論攷が公開された(納谷2004a・2005)。これによって7世紀前半の瓦生産の始まりが明確に提示され、その後の研究を牽引することになった。これらの研究は古代瓦研究会の一連の研究(古代瓦研究会2000)においても推進されており、その研究はさらに深化している(奈文研2009bc・2010bc)。

花谷はこれまであまり注目されなかった飛鳥出土の垂木先瓦を整理し、これに彩色が施されていることを確認、7世紀後半には金銅製の金具が出現することを指摘した(花谷2005a)。これに関連して、千田剛道は百済と日本の垂木先瓦についても考察している(千田2008)。

一方、瓦埴類のうち飛鳥・藤原地域の埴について、その使用遺跡の傾向について検討したのは廣岡孝信である。廣岡は埴の出土地と使用方法を集成し、寺院がもっとも多いとした。この中でも飛鳥宮や藤原宮での出土は少なく、平城宮の出土状況と比較しても、埴に対する考え方が異なることを指摘した(廣岡2003)。

文字資料論

この時期の出土遺物としての文字資料には墨書土器、木簡などがある。飛鳥藤原地域の墨書土器に関しては松村恵司が飛鳥藤原地域の墨書土器を時期的に検討し、その出現を7世紀中頃の飛鳥寺院とし、7世紀後半以降、官僚制度の整備に伴って充実するとみた(松村2003a)。

飛鳥藤原地域の出土木簡は、近年多数にのぼり、その実態が徐々にではあるが明らかとなってきた。その中でも「評制木簡」を集成し、その年代的な変遷や制度的な検討がなされた(奈文研2006d)。森公章は近年出土数が増加している7世紀の荷札木簡を体系的に検討している。7世紀中頃～後半にかけての荷札木簡の特徴を抽出することによって、その時々の変遷を明らかにした(森2006)。また、飛鳥池・山田寺・藤原京木簡の正式報告書が刊行された(奈文研2007b・2009c)。これら飛鳥藤原の木簡群を一堂に展覧した展示会が平成22年に飛鳥

資料館で開催された（飛鳥資料館2010bc）。

この時期の木簡研究は、前期に発見された飛鳥池遺跡出土木簡群と飛鳥京跡苑池出土木簡群、石神遺跡出土木簡群などを中心として進められ、飛鳥藤原地域出土木簡の総括的な集成・検討がなされた。木簡は飛鳥池遺跡の性格論にかかわる重要な資料となるが、寺崎の報告・検討（寺崎1998・1999）に対して、吉川真司は飛鳥池工房は「造飛鳥寺官」とでも称する機関が統轄し、寺院管理施設が北地区にあり、南地区を寺院工房とみる（吉川2001）。これに対して、寺崎は飛鳥寺の修造にあたり国家が関与したことは考えられるが、飛鳥寺のための工房ではなく、官寺に国家工房が関与したと理解すべきとした（寺崎2005・2006）。また、市大樹は飛鳥池遺跡の報告書において木簡を検討した。その結果、木簡からみると飛鳥池工房の本格的な操業時期を天武7年（678）頃とし、操業停止を藤原京遷都、遅くみても藤原宮前半であるとした。その工人組織としては東漢氏系渡来人が多いことも指摘する（市2010a）。

飛鳥池木簡の中でも、次米木簡「丁丑年十二月次米三野国」「丁丑年十二月次米三野国刀支評次米」に関しては、発見後に刊行された年報によって宮廷祭祀における米の貢進国悠紀・主基の主基に該当するとされた（奈文研1998・寺崎1999）。これに対して月次祭神今食の「次米」である可能性（山尾1998）や単なる食米とした理解が提示されている（早川1999）。しかし、山下信一郎は山尾・早川説を批判し、改めて新嘗祭の次米説を提示した（山下2002a）。さらに、これらの木簡の中には日本語表記にかかわるものも含まれており、万葉集をもって到達することも明らかとなってきた（乾2006）。

石神遺跡出土木簡のうち、最も注目を集めたのは具注暦木簡である。現時点においては最古の暦木簡であり、暦の種類や管理体制などが伺われる史料である（市2003・2004a・岡田2003・竹内2004a）。石神遺跡の北方から出土した木簡は多数あるが、これらを総合的に検討した。石神遺跡の7世紀後半の天武朝以降において、北方域周辺には、個別の性格は特定できないまでも、南方に官衙施設、北方に貴族・皇族の邸宅が近辺にあったことを指摘した（市2010a）。飛鳥京跡苑池から出上した木簡について、鶴見泰寿が紹介している。その結果、苑池は嶋官が管理されており、周辺にはアワビやワサビなどの食材が消費されていたと復元できる。さらに医療に関する役所が近辺に存在していたことも判明した（鶴見2002・和田2003b）。

市はさらに、藤原宮・京出土木簡群についても検討している。藤原宮内出土木簡群の検討から、宮の造営過程を解明し、官衙の性格特定にまで言及している（市2010a）。また、左京七条一坊出土木簡群は、速報段階では中務省関連の木簡群とされていた（奈文研2002a・山下2002b）が、全体の検討から衛門府にかかわる木簡群と理解され、宮外官衙として四町を占地であったと考えられ、運営実態を解明した（市2004b・2007a）。

銭貨論

銭貨をめぐる研究は飛鳥池遺跡から富本銭の鑄造遺構が確認されたことによって、新たな研究の段階を迎えた。当該年間ではこれを踏まえた富本銭の研究と、次の和同開珎の研究がさらに深化していくことになる。

無文銀銭については、松村恵司の主催する研究会で、初期貨幣史の検討の一貫として、検討されており、『日本書紀』天武12年の「銀銭」「銀」がいずれも無紋銀銭に該当するとした（松村2003b・松村・柴原2004）。また、富本銭の出土した遺跡を集成し、その分布や出土遺跡の性格、その背景について検討した。畿内では都城に限定されており、畿外でも極めて限られた地

域にしか確認されていない（松村2002a）。東野治之は東アジアの中での富本銭の位置づけを検討しているが、近年流通貨幣としての理解が有力になりつつあるが、厭勝銭の可能性についてもまだ検討の余地があるとする（東野2001）。なお、富本銭の七曜文については陰陽五行に伴う七曜文とされているが、桜井久之は七曜文を星座の昴宿とみる（桜井2001）。古和同について西橋遺跡出土の古和同について、制作技術を検討し、富本銭からの技術改良があったとみる（松村2005a）。

これらの初期貨幣の研究史を江戸時代から紐解き、近年の調査や研究成果を整理した。これによって和同開珎・富本銭・無文銀銭などの研究の到達点と課題を提示している（松村2005b）。

金属製品論

金属製品では、明治年間に古宮遺跡から出土したとされ、現在は宮内庁三の丸尚蔵館に所蔵されている金銅製四環壺が注目される。科学的な調査によって側面には唐草文と魚子文に、鳳凰が刻まれていることが判明した。その文様からは、7世紀後半から8世紀のものと推定され、火葬蔵骨器の可能性が高く、その有力な候補として中尾山古墳が挙げられる（奈文研2003c・西口2004）。また、石神遺跡から出土した完形にちかい鋸がある。7世紀後半のもので、これまで奈良時代の物は確認されていたが、法隆寺伝製品をのぞいて確認されていなかった。これら鋸を集成し、その意義付けを行っている（長谷川2007・2009a）。

土製品論

土製品では古代陶硯の検討が進んでいる。西口壽生は陶硯の出現と普及を検討するにあたり、まず7世紀の窯跡出土陶硯を概観し、続いて飛鳥藤原地域出土陶硯を検討した。その結果、陶硯の大きさと種類がとは使用主体の階層を現しているとした。また、その出現時期を7世紀中頃から後半とした（西口2003）。

工房遺物論

工房関係の遺物の検討はこの時期は少ない。この中でも、飛鳥宮跡東外郭堀の外側で大量に出土した漆貯蔵容器については、パレット等がないことから工房ではないが、流通センター的な機能が推定されている。この漆容器を題材に、漆の流通について検討したのが清岡廣子である（清岡2002・2005）。また、飛鳥池遺跡出土のガラス埴塼と類似の埴塼が韓国で出土している。この韓国百済出土の埴塼について紹介し、日本の埴塼との比較を行い、両者の関係を田庸昊が指摘している（田庸2008）。

石造物論

飛鳥の石造物の研究はこれまでに長い歴史がある。特に石造物全般にわたって検討を加えた猪熊兼勝の一連の研究は、その後の研究の指針となっている。その後は、飛鳥京跡苑池の新出土の石造物や、酒船石遺跡の亀形石槽によって、新たな研究段階に入った。亀形石槽については、その構造から湧水を聖なる水を溜める構造と理解し、古墳時代から続く導水施設の系譜を引く祭祀施設とみられる（西光2001a）。門脇禎二は亀形石槽を古代史の中で、酒船石遺跡と共に位置づけている（門脇2002a）、相原嘉之は水利用の石造物を出土した石神遺跡・飛鳥京跡苑池・酒船石遺跡について、石造物の構造と遺跡の立地から、同じ水利用の石造物でも、それぞれ

れ異なる性格をもつとした（相原2001a）。熊谷公男は石神遺跡A期の変遷と史料にみえる須弥山石の3度の記事が対応するとして、須弥山石の性格を検討した（熊谷2001a）。

鈴木一議は亀石の研究史と周辺の発掘成果を整理し、その時期を7世紀後半とし、調査で確認した溝を丘陵からの排水施設とみて、亀石周辺に苑池を想定した（鈴木2008）。相原は飛鳥地域の石造物出土遺跡の近年の成果を踏まえ、これらの石造物は斉明朝の所産の可能性が高いものの、さらに遡った皇極朝の可能性も残されているとして、今後の検討課題とした（相原2005a）。

橿原考古学研究所は吉備姫王墓に所在する猿石の保存処理にあたって、猿石の調査を宮内庁と共同で行った。その調査を契機として、大和の古代石造物を集成した図録を刊行している（橿研2001a）。この刊行にかかわった河上邦彦は石造物のうち猿石や酒船石・隼人石についての新たな指摘もしている（河上2002a）。奥田尚は飛鳥の石造物や古墳の石材産地を踏まえ、これらの総合的な検討を行っている（奥田2002・2006）。

V. 関連諸科学

自然科学

自然科学分析では、まず年輪年代法がある。小治田宮の墨書土器が出土した雷丘東方遺跡の井戸については、これまで井戸内の最下層から出土した土器によって、8世紀末頃と推定されていた（相原1999）。しかし、この井戸枠材の年輪年代を測定した結果、758年+ a と測定され、樹皮はなかったものの、極めて樹皮にちかい部分まで残っていたことが確認された。758年は淳仁天皇が即位した年であり、760年は小治田宮行幸の年である。この井戸はまさに淳仁天皇が小治田宮に行幸するために作られた井戸であることが確認されたのである（相原・光谷2002）。

宮内庁三の丸尚蔵館に所蔵されている金銅製四環壺が注目される。1879年の出土から123年後にX線撮影やCTスキャンなどの科学的な調査によって、唐草文と魚子文に鳳凰が刻まれていることが判明した（奈文研2003c）。このように、過去に出土した遺物を最新の機器を利用して再調査することによって、新たな歴史情報を抽出できる好例となった。このような再検討が今後もなされることにより、新事実が明らかになるものと考えられる。金属分析については、村上隆が飛鳥池遺跡の出土遺物から、銀精錬に「石吹法」とも称される技法が用いられていることが判明、さらにアマルガム法がなされていたことも推定できた。これらはこれまでの精錬技術の歴史を大きく遡るものである（村上2007ab）。

高松塚古墳の石室内において、壁画の蛍光X線分析を実施した。壁画そのものから顔料を採取することはできず、また、石室という矮小な空間では、大型の機器の導入はこれまでできなかった。そこで、携帯型の蛍光X線分析や赤外線画像の撮影などにより、顔料や壁面の科学的な分析を行った。その結果、壁面には鉛白が全面に塗られ、顔料の推定が可能となってきた（文化庁2004・早川ほか2004）。

石材分析

飛鳥地域における石材同定については奥田尚が積極的に行っている。飛鳥地域は石材の利用比率が藤原京以降の都城に比べても突出しており、宮殿・寺院・古墳の各種に及ぶ。その中でも酒船石遺跡の報告において、酒船石遺跡だけでなく、飛鳥地域における石材の使用傾向や使用石材の共通性について指摘した（明日香村2006a）。また、石材の種類や採石地の特定だけでなく、石材の加工技術や石材選択の意味まで検討を広げている（奥田2002・2006）

花粉分析

花粉分析を中心とした微遺体分析はいくつかの調査地において実施されているが、この時期は、飛鳥京跡苑池と酒船石遺跡の調査が中心である。飛鳥京跡苑池では、金原正明らによって、種子・花粉・珪藻の同定分析がなされた。その結果、苑池内やその周辺における植生が明らかとなり、飛鳥時代の苑池周辺の景観の植生がリアルに復元できるようになってきた（檀考研2002b）。一方、酒船石遺跡の亀形石槽周辺の時系列的な分析により、酒船石遺跡の時期的な環境変遷も明らかとなった（明日香村2001・2002）。

地震考古学

遺跡における過去の地震の痕跡を研究する学問分野に地震考古学がある。この研究を推進してきたのは寒川旭である（寒川2006）。近年、過去の地震についての意識が高くなっているが、飛鳥の遺跡において地震の影響が特に注目されたのは、高松塚古墳である。それまでも酒船石遺跡やカツマヤマ古墳において、地震の痕跡は確認されていたが（相原1995・明日香村2007a）、高松塚古墳の壁画保存問題において石室のゆがみや亀裂が確認され（奈文研2006b）、飛鳥地域の終末期古墳は、その立地からみても、大小さまざまな地震の影響を受けていることが認識されてきた。

環境分析

文化財保存環境の分析は、主に高松塚古墳・キトラ古墳壁画の保存に関わって実施されたものである。壁画の保存については、微生物の発生との主な原因である水分状況や温湿度などの保存環境がある。

この時期、高松塚古墳石室内の温湿度などの環境の調査や微生物の調査とその対策の検討は東京文化財研究所が中心となって、微生物対策としては石室内の環境制御には、温度を下げるしかないが、墳丘そのものを冷却し、石室の温度を下げることになった（石崎ほか2006a）。しかし、これも一時的なものにすぎず、壁画救出のための解体に伴う環境制御が次の課題となった（小椋ほか2007）。石室解体後は、修理施設での環境調査と壁画の修理が行われている。

VI. 保存と整備

文化財行政・整備計画

昭和41年、古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法（古都保存法）の制定に伴い、明日香村は古都に指定された。その後、昭和45年に奈良県風致条例、昭和55年に明日香村における歴史的風土の保存及び生活環境の整備等に関する特別措置法（明日香村特別措置法）が制定され、明日香村行政界全域において文化財と歴史的風土の保存の網がかけられている。このことから明日香村の行政指針として、これらの点は重要な柱となっている。明日香村では、昭和51年から10年ごとの明日香村総合計画を順次策定し、平成11年には第3次明日香村整備計画が策定された（明日香村1999）。明日香村の将来像を「産まれてよかった 住んでよかった 来てみてよかった ふるさと明日香」とし、村づくりの基本理念テーマを「健やかで豊かな生活を楽しむ」「明日香の歴史・万葉への憧憬を育む」「饗しの交流経済を興す」の3テーマとし、文化財関係では2番目のテーマを受け、凍結保存から創造的活用へということが提起された。

この3次第整備計画を受けて提唱された「明日香村まるごと博物館構想」は、明日香村にあ

る文化財・景観、そして住民を一体となして、エコミュージアム構想を掲げたものである。従来の箱物行政から脱却し、ソフトに重点をおいた政策として注目される。そして、平成21年には第4次明日香村総合計画を策定した。村の将来像を「古都の風格を育み、住む喜びと新たな魅力を創造する」とした（明日香村2009b）。この中では、明日香村の抱える様々な課題が提示されている。その中でも文化財にかかわるものとしては、歴史文化や景観への関心の高まりがあり、これを受けて歴史的文化遺産の活用が提起された。すでに第3次総合計画において「明日香村まるごと博物館構想」が提唱されており、これをより進めるための戦略的な施策として、①計画的・重点的な学術調査の推進、②史跡指定と公有化の推進、③活用を意識した史跡整備、④文化財保存活動の拠点形成、⑤文化財保存の人材育成と普及啓発、⑥世界遺産登録に向けた取り組みをあげている。

また、平成17年には明日香村内の遺跡保存と土地利用の方針を示した『明日香村総合管理計画』を策定した。従来、史跡の管理計画は、各史跡において策定するものであるが、明日香村においては史跡が数多く存在すると同時に、まだ史跡になっていない重要遺跡、さらには史跡間にも未知の重要な遺跡が予想されている。このことから、史跡指定地のみならず、明日香村内全域を対象とした文化財の管理計画を策定した（明日香村2005）。

文化的景観

平成17年、文化財保護法の一部改訂によって、新しい文化財の分野が位置づけられた。「文化的景観」である。文化的景観とは、風土に根ざして営まれてきた人々の生活や生業のあり方を表す景観地と定義されている。明日香村では、平成20年から稲渕の棚田を中心に、文化的景観の調査を開始し、平成21年5月には景観行政団体となっている。そして、平成23年1月に申し出を行った（明日香村2010c）。この奥飛鳥地域の文化的景観を理解するための一貫として、相原嘉之はこの地域の歴史的な変遷を考古学成果を基に構築した。その結果、現在の景観は中世にあることを指摘している（相原2009a）。奥飛鳥の文化的景観は、飛鳥川上流域において展開される、地形に即して営まれてきた居住のあり方と、農業を中心とした生業のあり方を示す価値の高い文化的景観として、平成23年9月に「奥飛鳥の文化的景観」として、明日香村大字稲渕・栢森・入谷の全域と祝戸・阪田の一部を含む565.8haが重要文化的景観に選定された。

保存問題

この時期の文化財の保存については、キトラ古墳と高松塚古墳のふたつの壁画保存問題が大勢を占めている。この古墳壁画の保存問題は、互いにリンクしており、特に、高松塚壁画は社会問題にまでなった。キトラ古墳では壁画が危機的にあったことと、石室内での保存環境が維持できないことから、壁画を含む漆喰の剥ぎ取りがなされた。壁画古墳は壁画が石室の中に原位置で残されていることに最大の価値がある。これに関して多くの議論があったが、緊急避難的な処置であることになった。

これと同じ頃、高松塚古墳の石室でも異常が発生していたのである。石室内の保存環境が変化しており、微生物による壁画の汚染が進行していた。これを受けて文化庁では平成15年に「国宝高松塚古墳壁画緊急保存対策検討会」を設置し応急的な対策を検討し、翌平成16年には「国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策検討会」を設置し、本格的な保存対策について検討をはじめた矢先に、白虎等の壁画が著しく劣化していることが報道機関によって明らかにされた。これと

同時に壁画保存の様々な検討した結果、苦渋の選択として、解体修理が決定された。一方で、これまでの修理・点検作業のなかで、壁画の損傷事故があったことが判明。文化庁は事故調査委員会を設置して、その経緯と原因について検証をおこなってきた。その結果、事故の背景には、文化庁内及び関係機関との連携体制に問題点があること。そして、情報公開とその説明責任についての認識の甘さが指摘された（高松塚2006）。平成20年には壁画の劣化原因を解明するため、「高松塚古墳壁画劣化原因調査検討会」を設置した。そこでは連携・協働による管理体制の確立、恒久的なチェック体制の構築、そして常に未来に備えることが指摘された（高松塚2010）。

これらを踏まえ、ふたつの古墳壁画の保存の経緯と今後について詳細に検証していたのは毛利和雄である（毛利2007a）。また相原もこれらの経緯を整理し、文化財保存の理念の再構築と継続的な検証の重要性今後への提言をしている（相原2010b）。

保存技術

保存技術に関しても、やはりキトラ古墳・高松塚古墳の壁画剥ぎ取りや解体作業に関わっている。平成16年にキトラ古墳の石室をはじめて開口した。そこで目のあたりにしたのは、今にも落ちそうな青龍そして白虎である。そこでこの壁画を含めてすべての壁画の剥ぎ取りが決まった。当初はヘラによる剥ぎ取りを行っていたが、漆喰が石面に固着している部分があり、ヘラによる剥ぎ取りに限界が生じてきた。そこで、ダイヤモンド・ワイヤーソーを開発し、固着した漆喰を剥ぎ取ることに成功した。しかし、朱雀は漆喰壁が極めて薄く、天井は湾曲しているため、ワイヤーソーでも困難を極めた。そこで新開発したのが、ダイヤモンド・バンドソーである。これらの機器を併用することによって、平成22年にすべての漆喰の剥ぎ取りを完了した。

一方、高松塚古墳では壁画救出のために、石室解体の技術が開発された。石材の事前調査や石材の解体治具の開発や方法。そして修理施設への搬出方法が検討されている（奈文研2008c）。

史跡指定及び指定文化財

平成26年1月現在、明日香村における国指定の史跡指定地は20件（うち特別史跡史跡3件）で、総面積494,122㎡、県指定史跡2件、村指定史跡2件がある。当該年間に新たに史跡に指定、あるいは追加指定されたものには、飛鳥池工房遺跡・檜隈寺跡・飛鳥京跡苑池・飛鳥稲淵宮殿跡・酒船石遺跡・岡寺跡がある。

飛鳥池工房遺跡は、万葉文化館の建設に伴い、飛鳥時代最大の総合工房と判明した遺跡である。ここから出土した工房関連遺物や木簡は、飛鳥時代の生産システムを具体的かつ、詳細に表示していた。この中でも、富本銭の鑄造は、我が国の流通経済や国家の充実度を示すものとされている。これらのことから、平成13年8月13日に史跡指定された。檜隈寺跡は、長らく答申だけを受けて、未告示で残されていた。現在の於美阿志神社境内の地を平成15年3月25日に改めて史跡として告示された。渡来系氏族の寺院として評価と、伽藍の残存状況が史跡指定の理由である。飛鳥京跡苑池は、平成10年の調査ではじめて確認された、飛鳥宮に付随する巨大な苑池である。後の日本庭園へと繋がる、我が国初の本格的庭園と位置づけられることになり、平成15年8月25日に27413㎡が史跡及び名勝指定された。平成16年2月27日には、飛鳥稲淵宮殿跡の史跡追加の同意を得られ、追加指定された。これによって、当遺跡は道路に囲まれた範囲が文化財保護の網がかかったことになった。そして、飛鳥池工房遺跡の南に位置する史跡酒船石は、丘陵上に石垣が巡り、北側の谷底では亀形石槽が発見されている。この遺跡が、『日本書

(平成26年3月31日現在)

種別	名称	所在地	面積 (㎡)	指定年月日	所有者	管理団体	備考
特別史跡	石舞台古墳	島庄 祝戸	12,317	昭10.12.24 昭27. 3.29特別史跡	国 奈良県 明日香村	奈良県	
特別史跡	高松塚古墳	平田	913	昭47. 6.17 昭48. 4.23特別史跡	国	明日香村	壁画は国宝指定
特別史跡	キトラ古墳	阿部山	4,301	平12. 7.31 平12.11.24特別史跡	国 明日香村	明日香村	
国史跡	川原寺跡	川原	73,839	大10. 3. 3 昭41. 6.21追加 昭63. 3.14追加	国 奈良県 明日香村 民有地	明日香村	
国史跡	大官大寺跡	小山	46,642	大10. 3. 3	国 明日香村 民有地	明日香村	
国史跡	牽牛子塚古墳・ 越塚御門古墳	越	11,556.8	大12. 3. 7 平26. 3.18	明日香村	明日香村	
国史跡	中尾山古墳	平田	987	昭 2. 4. 8	明日香村		
国史跡	酒船石遺跡	飛鳥 岡	31,464	昭 2. 4. 8 平16. 9.30追加 平16. 9.30名称変更	国 奈良県 明日香村 民有地	明日香村	
国史跡	飛鳥寺跡	飛鳥	46,184	昭41. 4.21	奈良県 民有地	明日香村	
国史跡	橘寺旧境内	橘	95,245	昭41. 4.21	奈良県 民有地		
国史跡	定林寺跡	立部	17,163	昭41. 2.25 平 5. 3. 4追加	国 民有地	明日香村	
国史跡	岩屋山古墳	越	1,125	昭43. 5.11	明日香村		
国史跡	伝飛鳥板蓋宮跡	岡	9,308	昭47. 4.10 昭58. 1.12追加 昭58. 5.19追加 平 4. 4.21追加	奈良県 民有地		
国史跡	飛鳥水落遺跡	飛鳥	1,219	昭51. 2.20 昭57. 3.23追加	明日香村		
国史跡	飛鳥稲淵宮殿跡	稲淵 祝戸	12,750	昭54. 3.20 昭56. 5.16追加 平16. 2.27追加	国 民有地	明日香村	
国史跡	マルコ山古墳	真弓	3,028	昭57. 8.29追加 平20. 8.13	明日香村 民有地		
国史跡	飛鳥池工房遺跡	飛鳥	19,981	平13. 8.13	奈良県		
国史跡	檜隈寺跡	檜前	7,611	平15. 3.25	民有地		
国史跡 名勝	飛鳥京跡苑池	岡	27,413	平15. 8.27	奈良県 民有地		
国史跡	岡寺跡	岡	82,865	平17. 8.29	民有地		
県史跡	豊浦寺跡	豊浦		昭52. 3.22	民有地		
県史跡	紀寺跡	小山		平 5. 3. 5	奈良県 民有地		
村史跡	飛鳥川の飛石	稲淵		昭52. 4. 1			
村史跡	南淵請安先生の墓	稲淵		昭52. 4. 1			

第3表 明日香村内史蹟一覧表

紀』にある「宮東山」であると考えられることから、平成16年9月30日に丘陵全体を酒船石遺跡として、名称変更及び追加指定がなされた。岡寺跡は、檜隈寺跡同様に、未告示で残されていたものである。現財の岡寺境内地及び、旧境内地であった治田神社境内を含めて、平成17年8月29日に史跡となった。マルコ山古墳は、墳丘東側の発掘調査で多角形墳であることを受け、その部分を平成20年8月29日に追加指定をした。

この他に、村指定の無形文化財として、明日香の響保存会の八雲琴が平成21年2月10日に村指定文化財となった。これは飛鳥寺先々代住職の山本雨宝が国選定の文化財保存技術保持者であったものを引き継いだものである。

環境整備

この時期、明日香村内での遺跡整備は、檜隈寺跡と酒船石遺跡、高松塚古墳、飛鳥京跡苑池の整備事業が始まった。

檜隈寺跡は、神社境内地ではあったが、講堂土壇を整備した。これまで、礎石のいくつかは確認できる土壇であったが、土壇上には樹木も多く茂っていたことから、地下遺構への影響が危惧されたことと、伽藍の理解ができないことが課題となっていた。そこで、講堂上の最低限度の樹木伐採と、講堂基壇の明示、そして礎石の露出を行うとともに、解説板を平成16年に設置した。酒船石遺跡は、亀形石槽の発見を受けて、平成13年に、この地域の仮整備を行っている。整備は亀形石槽をはじめとする石造物、石敷・石段を保存修理の上、露出展示を行っている。砂岩列や砂岩湧水施設は、石材強度の問題からレプリカ整備としているが、従来地下保存で、地表に復元整備を行っていたが、明日香で唯一といってよいほどの、実物展示となっている（明日香村2006a）。高松塚古墳は、石室の解体に伴い、発掘成果をもとに、築造当初の姿に復元整備を文化庁が平成21年に行った。全体を張り芝として、マルコ山に並ぶ終末期古墳の整備となった。飛鳥京跡苑池は、史跡・名勝指定の後、しばらくの時間が空いていたが、平成22年から奈良県事業として公有化がはじまった。南池を中心に整備が進められることになるが、このための発掘調査も実施されている。この整備が完成すると飛鳥ではめずらしく、古代を体感できる歴史空間となる。

展覧会・講演会

飛鳥をテーマの中心に据えた展覧会は、全国的にも数多くあり、講演会も多様である。明日香村内にある歴史系博物館として、昭和50年に開館した奈良文化財研究所飛鳥資料館では、春秋二回、飛鳥にかかわる特別展を開催し、あわせて講演会も実施している。この中でも、明日香村と本格的に共同開催したものに、『飛鳥の奥津城』がある（飛鳥資料館2005a）。これがキトラ古墳壁画の公開につながっていった。まず「白虎」からはじまり、「玄武」「十二支」「青龍・白虎」と公開され、平成22年の平城遷都1300年の年には、朱雀を含む「四神」すべてが公開されと、合わせて27万人の観覧があった（飛鳥資料館2006a・2007a・2008a・2009a・2010a）。同年、同じ時期に、明日香村の指定文化財である仏像を一堂に会した『大飛鳥展』が万葉文化館で開催したされている。

このほかにも、飛鳥をテーマとした展覧会を毎年開催している。また、平成18年度からは、飛鳥地域を調査している奈良文化財研究所・橿原考古学研究所・明日香村教育委員会の共催による速報展『飛鳥の考古学』をはじめた。さらに、奈良文化財研究所創立50周年記念展覧会とし

て、『飛鳥・藤原京展』を全国で開催し、飛鳥藤原京研究の集大成となっている（奈文研2002c）。

飛鳥をテーマとした展覧会は橿原考古学研究所附属博物館でも開催されている。直接関連する展覧会には、『飛鳥の苑池』『天武・持統朝』『宮都飛鳥』などがある（橿研博物館2003・2004・2008b）。いずれも飛鳥地域を研究対象のひとつとしている研究所としての重要な研究テーマである。特に、『宮都飛鳥』は橿原考古学研究所創立70周年として、飛鳥宮跡をその対象としていた。

この他に、飛鳥に特に関わる展覧会として、大阪府立近つ飛鳥博物館の特別展がある。ここは、古墳時代を専門とする博物館であるが、その終末期の7世紀は、飛鳥時代に重なる。よって、この時代の展覧会も多い。特に、『壁画古墳の流れ』『古墳から奈良時代へ』『ふたつの飛鳥野終末期古墳』は、キトラ・高松塚の壁画や墓制を扱ったもので、終末期古墳の理解に重要である（近つ飛鳥博物館2003・2004・2010）。

世界遺産登録

平成18年、文化庁は各都道府県に対して、これまでの国による指定から、地方からの提案書による審査方式に変更した。これを受けて奈良県・橿原市・桜井市・明日香村は共同で提案書を提出をした。全国地方自治体から24件の提案書の提出があり、このうち4件が審査の結果、暫定リストに登録されることになった。「富岡製糸場と絹産業遺産群（群馬県）」「富士山（静岡県・山梨県）」「長崎の教会群とキリスト教関連資産群（長崎県）」、そして「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」である。この「飛鳥・藤原」のコンセプトは、東アジア世界との交流と、我が国古来から文化との融合により形成された独特な文化であること。そして、これが現在の社会・文化・習慣の息づいていることにある。まさに「日本国誕生」の歴史を物語る希有な資産群であるといえる（相原2008・橿原市2008）。その後、登録推進協議会を設立し、さらに専門委員会を立ち上げた。ここで、コンセプトやOUV、プロパティーズン、バッファゾーンなどを検討している。しかし、「飛鳥・藤原」の資産群は埋蔵文化財であることから、この価値証明の方法と資産の表現方法が大きな課題となっている。これらの課題を克服すべく、様々な取り組みを行っているが、特に海外からの眼というものが重要となり、海外の専門家を招聘して、これらを模索している。

Ⅶ. 総括—10年の調査研究の動向と課題—

これまで2001年から2010年までの文化財研究について紹介してきた。ここではこの10年間の総括を踏まえ、次の10年を展望して、総括とする¹⁾。

遺跡研究において、宮都論は伝承飛鳥板蓋宮跡の内郭中心部の構造が判明した。これによって宮中枢部の建物配置が確定し、その建物の性格についての研究も進んでいる。そして、飛鳥宮跡北辺の調査では、北を限る石組大溝を確認したが、残念ながら北面大垣そのものは確認できていない。今後は、北限の確定と、外郭内の解明が重要な課題となる。そして、さらに広範囲の飛鳥の都市空間についての研究が必要であろう。そして、所在地すら確定していない7世紀前半の宮についての追求も必要となる。都城論については藤原宮朝堂院地区の調査によって、その造営過程が判明してきた。これらを整理し、藤原宮・京の造営の時系列に解明する必要がある。また、京城についても十条十坊説が有力となりつつあるが、造営の実態について検討しなければいけない点もある。そして、宅地の実態など、まだ調査の及んでいない点も多い。こ

れらは国家形成史・都城史の中での検討が必要であり、都城制研究集会などの研究の進捗に期待がかかる。苑池論は飛鳥京跡苑池の発掘によって、大きく進捗した。飛鳥時代の苑池の実態と、時期別の変遷や東アジアの影響などの解明が大きな視点となる。これに関連して、平成22年からはじまった、飛鳥京跡苑池の復原整備に伴う調査で、苑池が完全に調査されることによって、大きな成果を得られると思われる。寺院論では、大きな寺院跡の調査はないが、山田寺跡・吉備池廃寺跡の報告書が刊行された。これによって両寺院の内容が詳細に報告され、飛鳥の寺院研究の定点となる。この時期は、瓦文様によって、造営氏族の解明が進んだ時期ではあるが、やはり、他の寺院の調査報告書の刊行が待たれる。そして、飛鳥の古代寺院の中で、未だに所在地すら判明していない高市大寺の解明が急がれる。工房論では飛鳥池工場の調査が進み、飛鳥時代の工房組織や生産形態が明らかになってきている。これらは出土遺物の考古学的・自然科学的な検討によって、より具体的な様相が判明するものと考えられる。すでに一部にはこれらの成果が判明しているものの、総合的な正式報告書の刊行が待たれる。同時に、この時期に判明した寺院付属工房（川原寺・檜隈寺）との比較研究も重要となろう。古墳論ではキトラ古墳・高松塚古墳の保存にかかわる調査によって終末期古墳の研究が進んだ。これらは今後の終末期古墳の大きな基点となるとともに、壁画研究・装飾古墳研究の指針ともなる。飛鳥前史は『続明日香村史』の刊行にともなって、縄文時代から古墳時代の各時代の研究の現状が整理されている。今後はこれらの成果をもとに、飛鳥前史の歴史復原の段階となる。これに対して、飛鳥時代以降の解明も必要となる。現在の歴史的風土の形成過程については提示されたが、『続明日香村史』にあるような中世・近世の詳細な歴史叙述も必要であろう。

遺物研究において、土器論では飛鳥ⅠⅡの資料の増加により、その編年研究は精緻になってきている。しかし、飛鳥Ⅲの資料が少なく、大きな課題となる。これまでの基準資料の公開と編年基準の共有が求められる。瓦塼論では古代瓦研究会の一連の研究会が評価される。今後も、より詳細な検討と、東アジア的な交流についての検討が必要であろう。文字資料論では飛鳥池工場と石神遺跡での木簡の検討が進められてきた。これを含めて7世紀代の木簡が集成されている。銭貨論では富本銭の出土によって和同開珎・無文銀銭を含めた初期銭貨の研究が進んだ。現段階においては、一定の研究水準に達していると考えられる。しかし、富本銭については藤原宮において、新たな富本銭が出土し、その鑄造年代と鑄造組織・体制の解明が望まれる。金属製品論では、金銅製四環壺の科学的な調査がはじめてなされた。あくまでも中間的な調査であったが、平成23年に第2次調査がなされている。既出土遺物の再調査は今後も大いに期待される。土製品論では様々な遺物があるが、いずれも各遺物においける集成と研究を推し進める必要がある。工房遺物論では飛鳥池工場の整理が進む中、東アジア的な視野での技術交流の検証が必要となる。石造物論では新たな石造物の出土により、次なる研究段階に入ったが、その製作年代・製作技法・性格などの解明がなお必要である。

関連諸科学では自然科学分析が今後も重点になる。これまでの文化財調査では考古学的な分析が主流ではあるが、自然科学との密接な連携により、これまでになかったデータの提供がみられる。特に、近年では年輪年代測定法やC14測定法の精度や技術があがっており期待される。石材・花粉分析については、これまでにもデータの積み重ねがあるが、より広範囲なデータ取得とこれを利用した当時の総合的な環境復元などが求められる。また、近年とくに注目されるのは地震考古学である。これまでも指摘されていたが、高松塚古墳の解体に伴う発掘調査以降、飛鳥の終末期古墳には、大小様々な影響を受けていることが判明している。今後は古墳だけで

なく、平野部の遺跡における地震の痕跡に眼を向けるべきであろう。保存環境と保存技術は、キトラ古墳・高松塚古墳の保存に関わって進んできた。これらの技術やデータが、他の文化財保存への応用が期待される。

保存と整備については、整備計画の推進があげられる。これを踏まえながら、他地域にはない文化財の総合管理計画が策定されたが、その後の社会情勢による改訂が必要となってきた。文化的景観は、新しくできた文化財であるが、平成23年に重要文化的景観に選定された。これまで、文化財としては地下の埋蔵文化財中心であったが、奥飛鳥地域については景観も文化財となった。これまでの古都法とは違った保護措置が必要となる。保存問題は、キトラ・高松塚壁画が問題となったが、壁画のはぎとり・解体修理がなされた今、保存・公開の手法が議論となる。キトラ壁画は、国営公園内の古墳ちかくに公開施設が建設されることになったが、高松塚壁画の保存方法が現在の課題である。史跡指定については、甘樫丘・烏庄遺跡など未告示で残っているが、他にも、飛鳥宮跡や大官大寺跡など、史跡指定地の狭い遺跡についての史跡拡大が急務となる。環境整備については飛鳥京跡苑池の復原整備が進められており、飛鳥時代を体感できる拠点となろう。また、牽牛子塚古墳の整備も事業化され、さらに飛鳥宮跡の整備構想も進められている。ソフトとハードの使い分けによる整備が望まれる。そして、これらが世界遺産推進の大きな原動力のひとつになることが期待される。

20世紀は発掘調査によって、次々と新しい事実が判明し、歴史が塗り替えられてきた時代であった。一方、21世紀は、最先端科学技術を応用することによって、次々と新たな成果があがってきた。新世紀の考古学を象徴しているかのようであった。しかし、高松塚・キトラ古墳壁画の保存問題に直面し、この科学技術が文化財保存にとって万能なものではなく、それを利用する我々の姿勢にかかっていることも明らかとなってきた。このことは、すべての点において、教訓となると共に、これらの課題を克服する不断の努力が求められるのである。

明日香村総合計画では、「古都の風格を育み、住む喜びと新たな魅力を創造する」を謳っている。明日香村には、「日本国誕生」の歴史を示す文化財が地下に埋蔵されている。しかし、これらの歴史を物語る素地がまだ不足している。地下に埋もれて見えない遺跡や古代の風景と歴史、眼に見えないものの可視化が必要である。「遺跡が見える」「古代の景観が見える」「飛鳥の歴史が見える」という「見える化」が必要となる。その手段は様々であるが、飛鳥京跡苑池や牽牛子塚古墳、そして飛鳥宮跡の「見える化」が進められている。現在の景観と住民生活との調整を図りながら、様々な手法を用いた推進が求められることになろう。他の地域とは異なる文化財保存施策の強力な推進が、調査研究の先に見据えることが必要である。

(平成26年2月6日稿了)

【註】

- 1) この10年間に、飛鳥研究を推進してきた多くの研究者の訃報に触れることになった。2003年12月18日、明日香村教育委員会文化財課埋蔵文化財室長であった納谷守幸氏が亡くなられた。納谷氏は明日香村での文化財保護を牽引してきたと同時に、飛鳥の瓦研究の推進者でもあり、我々の良き指導者としての存在でもあった。2006年7月29日には、関西大学名誉教授で、明日香村文化財顧問であった網干善教先生が亡くなられた。高松塚古墳をはじめ、飛鳥の多くの遺跡を調査研究してこられたが、高松塚石室解体の前に、その生涯を閉じられた。2007年6月12日には、京都府立大学名誉教授の門脇禎二先生が亡くなられた。先生は、酒船石遺跡の調査委員会の委員長を務めて

いただただけでなく、飛鳥時代史さらに古代史において、大きな影響を与えていただいた。そして、2008年3月17日には元奈良文化財研究所飛鳥・藤原宮跡発掘調査部長の金子裕之氏が亡くなられた。飛鳥のみならず、日本都城制や祭祀についての研究を進められており、酒船石遺跡の調査にあたっては、多くの示唆をいただいていた。いずれの先生方においても、これまでより直接・間接に様々な形でご教示いただいております、今後もご教示いただきたい点が多くあったのに非常に残念である。

【参考・引用文献（「飛鳥研究関連文献目録2001～2010」以外のものを記した）】

- 相原嘉之1993 「倭京の実像－飛鳥地域における京の成立過程－」『紀要 第6号』滋賀県文化財保護協会
- 相原嘉之1995 「飛鳥地域における地震の痕跡－酒船石遺跡と白鳳南海地震－」『古代学研究 第131号』古代学研究会
- 相原嘉之1999 「小治田宮の土器－雷丘東方遺跡出土土器の再検討－」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
- 相原嘉之2011 「飛鳥考古学の軌跡－調査研究と保護の歩み－」『飛鳥遺珍－のこされた至宝たち－』飛鳥資料館
- 相原嘉之2013 「飛鳥研究関連文献目録2001～2010（稿）」『明日香村文化財調査研究紀要 第12号』
- 明日香村1999 「第3次明日香村総合計画」
- 明日香村教育委員会2011 「明日香村遺跡調査概報 平成21年度」
- 明日香村教育委員会2012a 「竹田遺跡発掘調査報告書」
- 明日香村教育委員会2012b 「明日香村遺跡調査概報 平成22年度」
- 明日香村教育委員会2013a 「キトラ公園内遺跡発掘調査報告書－国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区整備事業に伴う調査－」
- 明日香村教育委員会2013b 「牽牛子塚古墳発掘調査報告書－飛鳥野削り貫き式横口式石槨の調査－」
- 阿部義平1997 「倭京の都市指標－日本列島における都城形成－」『国立歴史民俗博物館 第74集』
- 江浦 洋1988 「日本出土の統一新羅系土器とその背景」『考古学雑誌 第74巻第2号』日本考古学会
- 小澤 毅1997 「古代都市『藤原京』の成立」『考古学研究 第44巻第3号』考古学研究会
- 小澤 毅1998 「都城としての藤原京・平城京」『奈良県史 第8巻建築』名著出版
- 橿原考古学研究所2010 「奈良県遺跡調査概報2009年」
- 橿原考古学研究所2011a 「飛鳥京跡Ⅳ－外郭北部地域の調査－」
- 橿原考古学研究所2011b 「奈良県遺跡調査概報2009年度（第四分冊）」
- 橿原考古学研究所2011c 「奈良県遺跡調査概報2010年度（第二分冊）」
- 橿原考古学研究所附属博物館2011 「大和を掘る29－2010年度発掘調査速報展－」
- 橿原考古学研究所2012 「史跡・名勝 飛鳥京跡苑池一」
- 橿原市教育委員会2011 「平成21（2009）年度 橿原市埋蔵文化財年報」
- 橿原市教育委員会2012 「平成22（2010）年度 橿原市埋蔵文化財年報」
- 亀田 博1997 「飛鳥浄御原宮」『古代都城制研究集会第二回報告集 都城における行政機構の成立と展開』奈良国立文化財研究所
- 黒崎 直2011 「飛鳥の都市計画を解く」同成社
- 桜井市文化財協会2012 「桜井市内埋蔵文化財 2002年度発掘調査報告書6」
- 清水眞一1999 「須弥山・呉橋考」『同志社大学考古学シリーズⅦ 考古学に学ぶ』同志社大学
- 高瀬要一1998 「飛鳥時代・奈良時代の庭園遺構」『ランドスケープ研究 61』日本造園学会
- 高取町教育委員会2012 「与楽カンジョ古墳・与楽鐘子塚古墳発掘調査報告書」
- 巽淳一郎1998 「7世紀後葉の海外交渉を物語る焼物」『季刊明日香風 第66号』飛鳥保存財団
- 寺崎保広1998 「天皇のルーツを発掘する」『現代 1998-7』講談社

- 寺崎保広1999 「飛鳥池遺跡の木簡」『木簡研究 第21号』木簡学会
- 中村太一1996 「藤原京と『周礼』王城プラン」『日本歴史 第582号』吉川弘文館
- 中村太一1999 「藤原京の『条坊制』」『日本歴史 第612号』吉川弘文館
- 奈良国立文化財研究所1995 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ－飛鳥水落遺跡の調査－」
- 奈良国立文化財研究所1998 「奈良国立文化財研究所年報1998－Ⅱ」
- 奈良文化財研究所2011a 「奈良文化財研究所紀要2011」
- 早川万年1999 「丁丑年三野国木簡についての覚書」『岐阜史学 第96号』岐阜史学会
- 山尾幸久1998 「飛鳥池遺跡出土木簡の考察－『天皇』創出期の政治と思想－」『東アジアの古代文化 97号』大和書房
- 大和弥生文化の会1995 「大和の弥生遺跡 基礎資料Ⅰ」